
魔法少女リリカル.....ラジオ！(仮名)

Arishia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカル……ラジオ！（仮名）

【Nコード】

N7412M

【作者名】

A r i s h i a

【あらすじ】

「魔法少女リリカル……なんとか！」のラジオ番組！？

なんて無茶苦茶な……作者は正気なのか！？

第一回「安定した職を見つけるのは大変なのです！」（前書き）

やってしまった……後悔はちょっとしかしていない、反省なんてするわけではない！

第一回「安定した職を見つけるのは大変なのです！」

ゆう「は〜い！ みなさん、おはよう、こんにちは、こんばんわ〜
！ このラジオを聞いている時間に合わせて挨拶の返事をお願いし
ま〜す！」

ティア「なんなのこのテンションは……………」

ゆう「そう言う事言わない！ 記念すべき第一回の司会を務めるの
は、暁ゆうと！」

ティア「ティア・ランスターと」

「……………」

ゆう「……………って、あれ？」

ティア「いないわね……………」

ゆう「あ、すいませ〜ん、もう一人の司会は……………は？ サー イー
ワんでアイスを食べでて遅れてる？」

ティア「馬鹿スバル……………」

ゆう「あはは……………どうしよう?？」

ティア「仕方ないからこのまま二人で進めるわよ」

ゆう「りよ〜かいです、それでは、最初のコーナーに行ってみまし

よう!」

ゆう・ティア「リリカルなんとか裏話」

ティア「……なにこれ？」

ゆう「読んで字の如く、本編の「魔法少女リリカル……なんとか!」の没になったストーリーや制作秘話みたいな話をするやつだよ。今回は……あ、いきなりいない人のセリフがあるし……」

ティア「それじゃあ、仕方ないわね……」

ゆう「ああ、俺が二人分やるよ」

ティア「は?」

ゆう「はい! それでは本編で使用されたシーンです!」

暑い……暑いよお……

私の頭の中にはそれしか浮かばなかった。

ミッドチルダの空港でお姉ちゃんとはぐれちゃって、泣いていたら急に非常用のベルが辺りに鳴り響き、辺りはパニック状態になった。私も逃げようとするけど他の人達は私の事なんて見向きもしないで私を押し倒して我先にと飛び出していく。

思い切り転んでしまって私は泣いてしまい、そこから動けなくなっ
た……

辺りは次第に火の海となって行き、ますます暑くなり、逃げられる場所もなくなっていく。

「ひっく……助けて……助けてよう……」
「オッケー、助けるよ」

涙でぼやけた視界に映るのは黒っぽい服を着ている人だった。
中性的な声で男か女かは分からない。
だけど、とっても安心できる声で
私は頷いた。

ドゴオオオオン！！

突然、爆音のした方を向くと柱が私達のいる所めがけて倒れてくる所だった。

私は思わず目を閉じそうになるが……

「こういうのなら……レイジングハート」
『イエス、マイマスター』

黒っぽい服を着ている人は一瞬で真っ白なバリアジャケットを纏い、
桃色のバインドをかけることで柱が倒れてくるのを防ぐ。

「さて……このクソ暑い所とはさっさとおさらばしたいんだけど……
構わないか？」

あまりに綺麗な動きに私は言葉を失っていたけれど白い魔導師さんは
答えを期待していなかったのかそのまま魔法陣を展開する。
そして杖を天井の方に構えると、

「デイバイン……バスター……！！」

桃色のレーザーが一瞬にして天井を撃ち抜いた。

私はそのまま白い魔導師さんに抱きかかえられ、撃ち抜いた天井から脱出した。

白い魔導師さんは通信で何か言っていたけれど私はそのまま意識を失った。

だけど……これだけは言える。

私はあの強くて格好いい白い魔導師さんみたいになりたいって！

ティア「……ちよつと待って、今、完全にスバルの声がしたんだけど……」

ゆう「ああ、俺の108ある特技の一つ。変声機無しでどんな人の声でも真似できる」

ティア「怪盗 ット!?!」

ティア「私……本当はスバルのこと……」

ティア「ちょ!?! 人の声で何やってんのよ!?!」

ゆう「はい、それでは没になったシーンです」

暑い……暑いよお……

私の頭の中にはそれしか浮かばなかった。

ミッドチルダの空港でお姉ちゃんとはぐれちゃって、泣いていたら急に非常用のベルが辺りに鳴り響き、辺りはパニック状態になった。私も逃げようとするけど他の人達は私の事なんて見向きもしないで

ティア「出しちゃ駄目でしょ!?! いきなりグダグダな始まり方になるじゃない!?!」

ゆう「ジエノサ ドブレイバー覚えたら強いと思うんだけどなあ…
…ん、んんっ」

ババトス「ジエノサイドオオオ……ブレイバアアア……
……!?!?!」

シュバル「かつこいい!?!」

ティア「ってスバル!? いつの間に!?!」

シュバル「違うよティア、私はシュバル! いつも元気でちよっぴり食いしん坊で可愛いスバルちゃんとは別人だよ!?!」

ティア「あんだ、自分のことをよくもまあそこまで……」

ゆう「……ちよっぴり?」

シュバル「ちよっぴり」

ゆう「……まあ、いいや。次のコーナー行ってみましょう」

ゆう・ティア・シュバル「……本音ぶっちゃけコーナー」

シュバル「このコーナーは匿名の人からハガキで「魔法少女リリカル……何とか!」のキャラに質問するコーナーだよ!」

ティア「今回は第一回だから私達が一個ずつ質問を出すと言う事で」

ゆう「はい！ それじゃあ俺から！ Yさんからの質問です！
管理局の白い悪魔と言えばなのはさんですが現状で魔王は誰ですか？」……だって」

シュバル「うわぁ……」

ティア「命知らずね……」

なのは「悪魔じゃないもん！ 魔王でもないもん！」

ヴィータ「でも悪魔でもいいって言ってたよな？」

優「あゝ、今のところ魔王は俺かな？ 闇の書の闇を潰す時相当怖かったらしい……自覚はなかったけど」

シュバル「じゃあ次は私！ Sさんからの質問です！ 「ミッドが一夫多妻制だったらラバーズと優はどうしますか？」……だって」

ラバーズ「……」（まずはバインドで動きを封じて媚薬で前後不覚になった所で既成事実を……）「……」

優「地球に帰ります」

ティア「えっと、最後に私。 Tさんからの質問です「なんでこんなやろうとしたんですか？」」

作者「いきなり全否定は止めよう」

ゆう「この後はあのキャラに言って欲しい言葉とかゲストさんとの

トークとか会ったりする予定なんだけど今回はこの辺で！」

シュバル「あ、大事なことを言い忘れてた！」

ティア「そうね、これだけは言っておくわ」

全員「……このお話は「魔法少女リリカル……なんか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャだったりキラ崩壊していても一切クレームは受け付けません！！」「……」

ゆう「ふう、これで大丈夫……」

ティア「次回もできるのかしら……」

シュバル「大丈夫だって！ また私達が頑張れば……」

作者「あ、ちなみに、司会をする人は感想板や活動報告、メッセとかで人気のあるキャラだからお前らみたいなさっくりさんキャラはもう出ないかも」

ゆう・ティア・シュバル「……え？」「……」

優「それでは、「魔法少女リリカル……なんか！」共々」

ユイ「この小説をよろしくお願いします」

ゆう・ティア・シュバル「締めを盗られたあああ……！」

第一回「安定した職を見つけるのは大変なのです！」（後書き）

ゆう「俺達に愛の手を！」

ティア「出番をください！」

シュバル「家にはお腹をすかせた子供がああぁ！」

優「と言う訳でこのようにゆるい感じにやっていくらしいので何となく気になったことやゲスト出演したい人は遠慮せずに感想板やメッセでお願いします」

ユイ「他にもこの小説について聞きたい事やこんなコーナーを取り入れて欲しいなどがあれば是非どうぞ」

ゆう・ティア・シュバル「」「また仕事を盗られたああ！！」「」

ヴィータ「お前らちゃんと司会しろよ……」

第二回「お仕事とはかくも辛いものなの！」（前書き）

本編の第二話を見てからご視聴ください。

作者との約束です！

あと、質問などがある人はラジオネームを送ってください。
すでに送ってくださった方申し訳ありません。

第二回「お仕事とはかくも辛いものなの!」

なによは「リリカルラジオが始まります!」

ゆう「はい! と言うわけで司会はわたくし、暁ゆうと!」

なによは「高町なによはがお送りします!」

ゆう「……あれ? シュバルとティアは?」

なによは「私の出番を求められていたから少し
O H A N A S
HIしてきたの!」

ゆう「ならオッケー!」

なによは「イエーイ!」

ゆう「はい! と言うわけで特別ゲストを!」

なによは「はい!」

ゆう「呼んでいるわけでございますけど!」

なによは「来てくれて感謝だね」

ゆう「初っ端から来ないって言うのがなくて良かったね!」

なによは「それはさすがにWWW」

ゆう「まあ、うん、まあ。それでは、特別ゲストに来ていただきましょう！」

なによは「はい！ 作者「秋代」様の書かれている作品「転生者はシャーマン」から「麻倉 葉生」君です！」

ゆう「いらっしやいませー！！」

葉生「あ、どうも……」

なによは「葉生君は、あれだよ。確か本編の方でも出てたよね？」

葉生「はい、StS編に入る前に一回だけ」

ゆう「それで、優とは親友以上のものを感じていると言う……噂がwww」

葉生「ふえ！？」

優「いいから、話を進めろ」

ゆう「痛っ！！！」

なによは「はーい、それでは葉生君、自己紹介と小説紹介を！」

葉生「あ、はい。僕の名前は麻倉 葉生です。時期的には無印前なので五歳です。性格……というか信条みたいなものとしては「友達は大切にします」です」

優「それじゃ、小説紹介をお願い」

葉生「シャーマンキング・ハオによつて殺された一人の男性。彼はハオの采配により麻倉家へと転生する事に…そして麻倉家へと転生した男は、葉生と言う名を授かり、シャーマンとして生活していく。三体の持霊を連れ、彼は魔法に出会う事になる…って感じ？」

優「ん、いいんじゃないの？ それじゃあ、まずはこのコーナー」

優・なには・葉生「「リリカルなんとか裏話」」「」

ゆう「俺の仕事を盗られた!？」

優「じゃ、葉生。これ読んで」

葉生「えっと、「リリカルなんとか裏話」は、作者が没にしたシーンを折角だからここでお披露目するコーナーです」

なには「今回のシーンはここなの!」

『グイータちゃん、ザフィーラ……追い込んだ、ガジェット? 型
そつちに三体!』

ザフィーラは一瞬で一体のガジェットを魔法で貫いたのを目の端で確認すると、あたしはアイゼンでガジェットを一体ぶっ潰した。残った一体が離脱しようとするけど……

「アイゼン!」

『シュワルベフリーゲン』

手に収まりきらならないぐらいの鉄球を出す。あたしは最後の一体を破壊した。

「片付いたか？」

「シャル、残りは？」

『残存兵力なし……全部潰し……！？ まだいる！ 気をつけて！』

シャルが叫ぶと同時にガジェットが廃屋から飛び出してくる。

「グイーター！」

まずった……このままじゃ喰らっちゃまう。

あたしが思わず目を閉じると、

「目標、ガジェット三体。タイムは三十秒」

「それだけあれば……！」

「十分だよ……！」

聞き覚えのある声と共にガジェットが破壊されたと思われる爆風が来る。

あたしは目の前の状況を確認しようと、ゆっくりと目を開くと、そこに立っていたのは……

「ガジェット三体撃破、記録二十四秒三二……上出来だ。慣らしを少ししかしてない割には手慣れたるじゃないか？」

「なのはやフェイト、はやてだけに任せきりなんて出来るわけないでしょ……！」

「えへへ。ほめてほめて」

「なあっ!? す、すずか!? 何してんのよ!?!」

「何言ってるの、アリサちゃん? 撫でてもらうんだよ? だつてちゃんと言われたとおりに出来たんだからご褒美貰ってもいいはずでしょ?」

「し、仕方ないわね! 私も撫でさせてあげるわよ! か、感謝しなさいよ!」

……はやての友達のアリサとすずかだっけ? 何であいつらがここに……いや、今はそんなことより……

「何でお前がここにいるんだよ!? ブツ飛ばさせる!」

「は!?! 意味が分かんないんですけど!?!」

とりあえず、ぶん殴ろう。話はそれからだ。

『嫉妬するヴィータちゃんも可愛い〜!』

「……大変だな」

ゆう「没シーン、スタート」

『ヴィータちゃん、ザフィーラ……追い込んだ、ガジェット? 型

そつちに三体!』

ザフィーラは一瞬で一体のガジェットを魔法で貫いたのを目の端で確認すると、あたしはアイゼンでガジェットを一体ぶっ潰した。残った一体が離脱しようとするけど……

「アイゼン!」

『シュワルベフリーゲン』

手に収まりきららないぐらいの鉄球を出すとあたしは最後の一体を破壊した。

「片付いたか？」

「シヤマル、残りは？」

『残存兵力なし……全部潰し……！？ まだいる！ 気をつけて！』

シヤマルが叫ぶと同時にガジェットが廃屋から飛び出してくる。

「グイータ！」

まずった……このままじゃ喰らっちゃう。

あたしが思わず目を閉じると、

「目標、ガジェット三体。タイムは三十秒」

「少しばかり戯れようか？」

出現するのは鎖、例外もなくただ締め上げる。

「流石は吸血姫」

優「これは駄目だわ……」

アリス「私何もしてないし……」

葉生「優より強いよね……」

なによは「次のコーナーに行くの」

優・葉生・アリサ「……本音ぶつちやけコーナー」

ゆう・なによは「仕事盗られた!？」

葉生「えーっと、このコーナーは送られてきた視聴者さんからの疑問を答えるコーナーです」

ゆう「くそ〜! なら最初は俺だ! ラジオネーム「なんとというカオスwww」さんからのお便りです! 「優とゆう、ティアナとティア、スバルとシユバルの違いって何ですか?」……だって!」

優「分かりやすく言う初音 クとはちゆね くの違いです、次!」

なによは「えーっと……ラジオネーム「H」さんからのお便りです。「今んとこ神様に好感が持てないけど、アレがデフォじゃないんだよね?」です!」

神様「デフォです」

全員「……マジで!？」

神様「好感持たれなくて大いに結構。楽しませてくれればそれで十分だからね」

優「マジで殴っていいかなあ……んじゃ、最後のコーナー」

ゆう・なによは「キャラクター対談コーナー!」

ゆう「やったー、盗られなかった！」

なによは「やったね！ ゆう君！」

優「んじゃ、俺と葉生の対談か……つってもなに話すかな？」

葉生「本編でも少し話してたからね……あ、相談したいことが！」

優「なんだ？」

葉生「……女の子が怖いです」

優「……奇遇だな、俺もだよ」

優・葉生「はあ……」

ゆう「ゲストとの対談コーナーがすっごく暗くなったから今日はここまで！」

なによは「それから大事なお話です！ …… O H A N A S H
I だと思った人、後で感想板に集合なの……」

アリス「この放送は「魔法少女リリカル……なんとか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャだったりキャラ崩壊していても一切クレームは受け付けません……」

ゆう・なによは「最後に盗られたああ……」

アリス「あと、ラジオに出して欲しいキャラがいたら書きこむと出るかもしれないわよ？」

ゆづ・なほは「」「わーん

第二回「お仕事とはかくも辛いものなの！」（後書き）

と言う訳で質問のある人はラジオネーム込みで、出して欲しいキャラなどがいたら感想でもメッセでも。

ラジオに登場させたいオリキャラなどがいらつしゃいましたらメッセでそのキャラの紹介と小説紹介をお願いします。

分からないことがあれば感想でもメッセでも構いません。

これからもよろしく願いします！

あ、少し、混んでるのでキャラを出して欲しいと書きこんだからと言っただけには出せませんので予めご了承ください。

第三回「ギャグ補正があるからできること……」（前書き）

いや、マジやばい……どうヤバいって原作キャラがマジでワカンネ

……

あ、これは原作と関係ないですよ？ ホントだよ？

第三回「ギャグ補正があるからできる」と……」

なによは「リリカルラジオ！」

ヘイト「やつてあげる」

なによは「ふえ！？ ヘイトちゃん！ 偉そうだよ！？」

ヘイト「何で私がこんな出ないといけないのよ。最悪……」

なによは「お、お仕事だから頑張ろ、ね？」

ヘイト「はあ、仕方ないからやつてあげるけど……とりあえずなによは、呼吸をやめなさい。貴重な酸素が無くなるわ」

なによは「にや！？」

ヘイト「なによ？」

なによは「うう……今回の司会は私、高町なによはと……」

ヘイト「……」

なによは「ヘイトちゃん！？ 紹介してよ！？」

ヘイト「は？ 何で私がこんなウジ虫どもに挨拶しなくちゃ紹介しなくちゃいけないのよ？」

なによは「うう……ヘイト・テストロツサちゃんがお送りします……」

…」

ヘイト「なに勝手に紹介しているのかしら？ おバカななには個人情報保護法つてものを知らないのかしら？」

なには「にゃー！！ ごめんなさーい！！」

【司会者が失踪したので少々お待ちください……】

優「えと、司会代理人の暁優です。正直、急遽ピンチヒッターと言
う事で俺しかいなかったので早速ゲストを呼びたいと思います。」
EDEX「様の作品「黒き翼✦BLACK WING✦」から、
主人公の「如月優太」さんです！」

優太「あ、どうも」

優「えっと、優太さんはついこの間、式をあげたらしいですが……
目標みたいなものはありますか？」

優太「あ、はい……とりあえず彼女達を悲しませないってところで
すね」

優「……彼女、達？」

優太「あ、うん、まあ……」

優「……聞かなかったことにしましょう」

優太「いやいや！ 絶対何か勘違いしてるでしょ!？」

優「それでは自己紹介と小説紹介をお願いします」

優太「あー！ もう！ えーっと俺、如月優太の出ている作品、「黒き翼」BLACK WING」は魔法少女リリカルなのはとは関係ないですが面白いです！ 作者曰く、俺は「リア充と死神（笑）とよく呼ばれる。好きなヒロイン達の誘いに断る事が出来ず、流されてるが、ヒロイン達が好きな為、「まあいいか」と思っている。そして目覚めた座右の銘が「据え膳食わぬは男の恥」……性格はめんどくさがりながらも面倒見が良い。優しい所もあり、恋愛感だけに關しては長けている。無駄な戦闘は好まず、知り合いとはあまり戦いたくないと思ってるが、知り合い等の戦闘をする場合は全力で応える】って作者ああ!？ 俺の評価酷くないかああ!？」

優「あ、えーっと……そだね、「据え膳食わぬは男の恥」だね」

優太「何でだろう？ お前にだけは言われたくない……」

優「はい、それでは小説紹介をお願いします」

優太「流した……てか流された……えーっと、はい！ 俺の登場する「黒き翼」BLACK WING」は、我が当店の黒き翼は、ピンクがドーンとぎっしり詰まっております。これを読むだけで……リア充についてや、リア充爆発しろと言う気持ちが生える特典付きです！ リア充についてや、ピンクの良さを知りたい場合は是非とも我が当店黒き翼をお願いします！ ってうおおい!？」

優「え〜、一樹さんに報告しておきますね」

優太「一樹さんって誰!？」

優「えっと、暴走迷惑少年の文化祭ネタで一緒に出演したと思うのですが……」

優太「ああ、うん。「白井健斗」さんの「スーパー・クエスト」のキャラね……」

優「感想板では気をつけてください」

優太「いやいや! 今のなし! 本当は「黒き翼……読むだけでピ
ンクの良さや、リア充爆発しろと言っ考えが身につきます。リア充
とは何か……ピンクとは何か……知りたい場合は是非お読み下さい」
って誰だああ!？」

優美「「如月優美」です。作者曰く、【優太の女バージョン。作者
の薬により2人に分ける事に成功。基本的に優太より積極的で、優
等の可愛いもの場合は積極的に仕掛ける。性格は穏やかだが、積
極的。何時も余裕を持って、発言する言葉の中にも余裕を感じる】
だそうです」

ヘイト「私のラジオを無断でやっているのは誰ですか？」

優「ええ!？ 個人の所有物だったの!？」

ヘイト「私に突っ込むなんてムカつきますね……」

優「理不尽だ!？」

ヘイト「理不尽で結構、私は嫌われ者ですから……hateの名前の通りに……」

全員「」「」「」

ヘイト「？今の突っ込む所ですよ？」

優「難しすぎるよ！？なんで前振りもなしにそんな高度なことを要求されるの！？」

なによは「うう……酷い目に遭ったの」

ヘイト「まだ生きてましたかクズ虫さん」

なによは「ふにゃ！？」

優「こらー！」

ヘイト「……いきなり女性の頭を叩くのはどうかと思います……」

優「いきなり人のことをクズ虫も失礼だ」

ヘイト「私を殴るとはいい度胸です。あなたの事が大嫌いになりました
hateだけに」

優「いや、そのネタもういいから」

ヘイト「顔も見たくありません。ですから膝の上に乗せることを義務付けます！」

優「……意味が分からん」

ヘイト「膝の上に乗っていればあなたのその大嫌いな顔も見ないで済みます　　h a t e だけに」

優「だからそのネタは……はあ、もういい、乗っていいからさっさとコーナー行こう」

なによは「ず、ずるいの！　私も乗りたいの！！」

優美「私も」

優「断固拒否する！」

なによは・優美「え」

優太「なんか最近口癖になってないか？」

優「言うな、最初はこのコーナー」

ヘイト「リリカルなんとか裏話」

優「ゲストに譲れよ!?」

ヘイト「嫌われ者ですから　　h a t e だけに」

優太「そのネタはもうい」「ハーケンセイバー！」

ヘイト「……黙りなさい」

優太「……はい」

優「それじゃ、優美さん。説明を」

優美「カンペ読めばいいんですね」

優「わざわざ言わないでよ!？」

優美「あら、ごめんなさい　えーっと、「リリカルなんとか裏話」のコーナーでは作者が没にしたシーンを折角だからここでお披露目しようといういかにも放送時間の延長が目的なコーナー」そんなの書いてないでしょ!？」　あら、ごめんなさい　目が悪くて、つい「

優「そんな設定初めて聞いたよ」

優美「ええ、今ここで決めましたから」

優「勝手に決めないでください!　では今回はこのシーンです!」

「うわあ、これが……」

「私達の、新デバイス……ですか?」

外見が変わっている新デバイスを見て私達が思わずそう呟くと、シヤリーさんは元気に手をあげて、

「そうです!　設計主任、私。協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとライン曹長……」

? まだいるみたいだけど気のせいかな?

「ストラダとケリユケイオンは変化なしかな?」

「うん、そうなのかな?」

「違いまーす! 変化なしは外見だけですよ?」

「リインさん!」

「はいです」

なんか楽しそうだな〜ってあれ? ティアどうしたんだろ?

「シャーリーさん……つかぬことをお聞きしますが暁優二等空佐はデバイス作りに参加していますか?」

「え、ええ!? してないよ? ほら! 優君って他の仕事とかもあるから今回は無理だったんだ!」

「そうですか……」

ティアは少し疑わしそうに、でもその言葉を聞いてほっとしたように言った。

暁優二等空佐ってそんなに信頼できない人だとは思わないんだけどな〜……何が不満なんだろう?

「えつと……機能説明してもいいかな?」

「「はい!」「」」

「……はい」

ティア……なんか怒ってる?

私はティアの様子が気になってシャーリーさんの説明をほとんど上の空で聞いてしまっていた。

「保有できる魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない」

「あ、あはは、そうですね」

いけない、いけない。ちゃんと聞かなくちゃ……

「一つの部隊でたくさん優秀な魔導師を保有したい場合はそことうまく収まるよう魔力の出力リミッターをかけるですよ」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

ふえー、やっぱり機動六課ってすごい人が集まってるんだなあ。その後になのはさんからはやて部隊長が4ランクダウン、隊長陣が平均3ランクダウンしていることを聞いた時は本当に驚いた。だってSSランクのはやて部隊長がAランクってことでしょ？

「後は暁優三等空佐が一番落として5ランクダウンでAランクだね」

「5ランク落としてAランクって!？」

「実質SSSランクじゃないですか!？」

「うん、優君は本来であればはやて部隊長より上の階級に行けるぐらいの人だからね……階級に拘らないせいか、ほとんど一緒に組んだ人の手柄に回しちゃうし……本来なら少将ぐらいはいつてるんじゃないかな？」

「少将って……」

「カリム・グラシア少将と同じですか……」

優さんってすごいなあ……

「でも……どんなに偉くなっただって結局助けられない人だっているじゃないですか!」

「ティアナ？」

「っ！ すみません、何でもありません……」

急にティアナが怒鳴りだして私達の間にも重い空気が漂った……だけど、

「！ このアラートって!？」

「一級警戒態勢!？」

「グリフィス君!」

『はい！ 教会本部から出動要請です』

『なのは隊長、フェイト隊長、アリサ隊長、すずか隊長グリフィス君！ こちらははやて！ 教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった！ 場所はそれぞれのデバイスに送っておくけど、対象はリニアールで移動中!』

「移動中って……」

「まさか!？」

「コントロールを奪われたの!？」

『その通りや、内部に侵入したガジェットにコントロールを奪われとる……新型の未確認ガジェットもおるかもしれない……みんな、いけるか?』

はやて部隊長の言葉に四人の隊長はみんな頷いた。

「隊長陣は現場指揮、フォワード陣とマテリアル陣は指示に従って殲滅や!」

「……はい!」「……」

優「色々自重したらしい」

「うわあ、これが……」

「私達の、新デバイス……ですか？」

外見が変わっている新デバイスを見て私達が思わずそう呟くと、シャーリーさんは元気に手をあげて、

「そうです！ 設計主任、私。協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長……」

？ まだいるみたいだけど気のせいかな？

「ストラーダとケリユケイオンは変化なしかな？」

「うん、そうなのかな？」

「違いまーす！ 変化なしは外見だけですよ？」

「リインさん！」

「はいです」

なんか楽しそうだな、ってあれ？ ティアどうしたんだろ？

「シャーリーさん……つかぬことをお聞きしますが暁優二等空佐はデバイス作りに参加していますか？」

「え、ええ！？ してないよ？ なんか赤い外套を羽織った皮肉げな言葉を吐く人と協力しただけだよ！？ おかげでほら！ 防御面に関しては鉄壁。攻撃面に関しては偽物の武器を創って爆破できるし！」

「……シャーリーさん、夢と現実の違いを見極められるようになってください……」

うん、さすがに私もどうかと思う……

優「シャーリーが痛い子扱いだな」

なには「次のコーナーにいき」本音ぶっちゃけコーナー」まだ言いきってないの……」

ヘイト「グズ虫にはちょうどいい」

優「殴るぞ？」

ヘイト「もう殴ってる……もう絶対に許さない。ここは私の定位置」

なには「ずるいの！」

優美「私もそこに座りたいな」

優「優太、説明」

優太「うん、「本音ぶっちゃけコーナー」では視聴者さんから送られてきた質問に答えます。最初はこれ！ ラジオネーム「A」さんからの質問です。「カリムはハーレムに入れないの？……どうなの？ 優？」

優「俺に聞くの！？ えっと……俺としてはこれ以上面倒なことに巻き込まれたくない」

優美「でもどうせ、誰かがカリムも入れろって言ったら性格とかが決まれば入れるんでしょ？」

優「あり得そうだから言わないで……次！」

優美「ラジオネーム「胃痛持ち」さんからの質問です。「まーちゃんとの相性はよかったか？」……私も気になるわね……ウフフ」

優「見事採用された胃痛持ちさんには全リミッター解除状態のレイをプレゼント！ 答えは彼に聞いてくれ！ ……聞ければけどね……」

なによは「（ガクガクブルブル）」

ヘイト「つ、次のコーナーにいきます！」

優太「お、おお！」

優美「あらあら、残念」

ヘイト「「シャマルの料理どれでしょう？」……間違えました」

なによは「そ、そうなの！ 次はキャラ対談のはずなの！ こんな誰かのいたずらに……「みなさ〜ん、料理を持ってきましたよ」お前の血は何色だ〜！〜！ ……なの」

優「シャマル一発KO……シャマルよ安らかに……」

はやて「ふっふっふっ、お前達はすでに包囲されている！ このスタジオに入った人が出る為にはこのコーナーに参加しなければならぬいんよ！〜！ 一つは私が作った料理やけど他は全部シャマルの料理……生憎、見た目で判断するのは無理やで！？ シャマルの料理

の腕は私並みになったんやからな！（見た目だけ）

優「……それってスタジオに入ってるお前も例外じゃないよな？」

はやて「……」

優「……」

なによは「……」

ヘイト「……」

優太「……」

優美「……」

はやて「……てへ」

優「いやいや可愛らしく誤魔化そうとしても無駄だから！」

なによは「と言う事は……」

ヘイト「ここから出るには……」

優太「一当たり（はやての料理）を食べる必要があるのか……」

優美「あらあら」

はやて「やむおえんで……みんなでいっせのーせで食べるんや……」

優「まあ、妥当だな……」

なによは「神様、仏様、悪魔様、魔王様、助けてください!!」

ヘイト「このコーナー、嫌いです hateだけに」

優太「せめて畳の上で死にたかったなあ……」

優美「畳ならありますよ?」

優太「あつて嬉しくない親切設定!!」

優「遺言状もあるけど……いるか?」

はやて「みんな静かにしいや! せーので食つで!! せーの!!」

優美「大変おいしかったです」

優「相変わらず、料理が下手だな……」

優美「そう言えば耐性がありましたね」

優「あつて嬉しくない即死耐性だ」

優美「それではそろそろ優太を連れていきますね？」

優「おう、死神、結婚直後に料理で死ぬは洒落にならないからギャグ補正でも何でもいいから復活させてくれ。こっちはこっちで何とかする」

優美「それでは締めをしてから帰りましょう」

優「ああ」

優・優美「この放送は「魔法少女リリカル……なんとか！」とは一切関係ありません！ストーリーがグチャグチャだったりキャラ崩壊していても一切クレームは受け付けません！！」

第三回「ギャグ補正があるからできること……」（後書き）

やっちゃった

キモいですね、すいません。

つーわけでカリムどうしましょ？（え？

活動報告にとくに書き込まれてなかったと思うので特に考えていなかったのですが……入れて欲しい方がいれば早めに性格などを決めて私に送るか、書き込むかをお願いします。

間に合えば頑張ってみます（他のキャラも例外に非ず）

第四回「残り物には福がある!？」（前書き）

はい！ 今回も性懲りもなくラジオ放送です！

と言うより、ゲストの人のストックがあと一組……

このラジオに出てもいいという心の広いお方！ どうか出演してください！

もしくはゲスト無しでも出来ることを！！

第四回「残り物には福がある!？」

ふあやて「リリカルリヤジオ、始めましゅ!！」

ヘイト「噛み噛みじゃないですか……嫌いです、h a t e だけに」

ふあやて「ご、ごめんなしゃい!！」

ヘイト「……司会は私と」

ふあやて「八神ふあやてです!！」

なによは「「やがみ」じゃなくて「やかみ」なのがポイントなの、高町なによはです」

ヘイト「あなたは出演して欲しいという声がなかったと思うのですが?」

なによは「そんなことないもん! ヘイトちゃんの意地悪!」

ヘイト「意地悪で結構、嫌われ者ですから h a t e だけに」

ふあやて「あ、あの本編の主人公しゃんは?」

なによは「出番がなくて落ち込んでいたら譲ってくれたの! とっても優しいの!」

ヘイト「あなたのせいで私が椅子に座れないんですね? 嫌いです

h a t e だけに」

それおいしいの？ なチート・オブ・チート（笑）かな？」

鈴「今、紹介をしてくれたのが妻、プロポーションは無駄にハイス
ペック。黒髪、黒目の純日本人で、重度のオタク、もはやダメ人間
仲の良い者には『ユリ』と呼ばせる。彼女なりの信頼の証。ちなみ
に転生前は大学で心理学の教師をしていて、その世界ではめっちゃ
ちや有名……『干渉する程度の能力』を持っていて万物に『干渉』
が可能だけど解釈とかは結構アバウト（笑）かな？」

ふあやて「しよれでは小説紹介を……」

百合姫「うん」

鈴「分かりやすく言うところだ」

1…死んで神様に会う。

2…チートになる。

3…過去の幻想郷に行く。

ヘイト「幻想郷？」

百合姫「幻想郷って言うのは私の理想郷！」

鈴「桃源郷！」

ヘイト「早くコーナーに行きなさい。ノロマは嫌いです
h a
teだけに」

ヘイト「ちなみに私はザンバリます」

百合姫「ザンバル!?」

鈴「どれ!?」

ヘイト「突っ込むとは生意気です。あなた達の事が嫌いになりました
た hate だけに」

百合姫「そんなこと言っているとみんな嫌いになっちゃうよ?」

ヘイト「べ、別にあんた達のことなんて好きじゃないんだから!」

百合姫・鈴「ツンデレっ子も萌えーーーー!!」

なによは「あ、あのヘイトちゃん? どこでそんな言葉を?」

ヘイト「とある人にこれを言えば大抵許されると言われました」

ふあやて「それは一部の人だけじゃにやいのかな……」

ヘイト「ザンバリますよ?」

ふあやて「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」

なによは「と、とりあえず最初のコーナーに行くの! 最初のコーナーは……」

百合姫・鈴「リリカルなんとか裏話」

なによは「にゃ!?!」

百合姫「甘いよ、なによはちゃん！ 私達夫婦はこのラジオを何回も聞いているんだから覚えられて当然!」

鈴「さあ、今回はどんな没シーンが見られるのかな？」

ヘイト「順番を守らない人、嫌いです hateだけに」

ふあやて「も、物事には順序があると思いましゅ!」

百合姫「ぶはっ!!(鼻血)」

鈴「ごはっ!!(吐血)」

ふあやて「ふ、ふええええええ!?!」

ヘイト「スタジオが汚れました。あとで拭いてもらいましゅ」

ふあやて「だ、駄目だよ！ ゲストしゃん放っておいて進めるリヤジオなんて聞いたことないよ!?!」

ヘイト「常にこのラジオが時代に先駆けするのです!」

なによは「いいのk「ザンバるのとサンダるのどちらがお望みですか?」「ごめんなさーい!?!」

ふあやて「え、えとえと今回はこのシーンでしゅ！ ゲストしゃん

を起こさないと……」

「凄まじい能力を持ってはいるんですが……制御がロクにできないんですよ。龍召喚もこの子を守るうとする龍が勝手に暴れるだけでお世辞にもまともな部隊で働けるとは言えませんね。精々、単独での殲滅戦に放り込むぐらい「ああ、もう結構です。ありがとございまして」では……」

また捨てられるのかな……もしかしたら私一人で戦うために受け入れられるかもしれない……

「いえ、この子は予定通り私の部隊で預かります」

私はその言葉を聞いて初めて目の前の人を見た。

金髪の長い髪をした優しそうな人……だからこそ、迷惑をかけたくなかった。

だから、引き取られた後もどこかにいなくなろうと思っていた。

「私は……今度はどこへ行けばいいんでしょう？」

優しそうなお姉さんは微笑みながら、

「それは、君がどこに行きたくて、何をしたいかによるよ……」

今まで言われたことのない言葉……私はしばらく呆然としていて、お姉さんは話を続ける。

「キャラは、どこに行つて、何をしたい？」

考えたこともなかった。

私がしたいことなんて……私がすることは全部だめで、許されるのは指示されたことだけ。

自分で考えて、自分で行動することなんてなかったから分からなかった。

「ちなみに私は私の弟であり、旦那様でもある優とあんなことやこんなことしたいなあ、って思ってるよ！もちろん、思うだけじゃなくて叶えるためには何でもやるつもりなんだ！」

お姉さんは人が変わったかのように身悶えし始めた。

いきなり雰囲気が変わって驚いたけど、私はその言葉を聞いて思った。

とりあえずは、お姉さんの大好きな人と会つてというのが目標でもいいかな……？

百合姫・鈴「未公開映像！」

ふあやて「ふえ！？」

「凄まじい能力を持つてはいるんですが……制御がロクにできないんですよ。龍召喚もこの子を守ろうとする龍が勝手に暴れるだけでお世辞にもまともな部隊で働けるとは言えませんね。精々、単独で

の殲滅戦に放り込むぐらい「ああ、もう結構です。ありがとうございます。ありがとうございました」では……」

また捨てられるのかな……もしかしたら私一人で戦うために受け入れられるかもしれない……

「いえ、この子は予定通り私の色に染めます！」

……意味が分からなかった。

「この子の強化魔法も使えば優にあんなことやこんなことをするの
も……えへへへへ、駄目だよ。優」

お姉さんの奇怪な動きにお姉さん以外の人が私を含めて半径三メートル以内に入らないようにしたのは誰にも責められないと思う。

ヘイト「変態ですね」

なによは「にや！？」ヘイトちゃんの元になった人だよ「ザンバるのとサンダるの両方をお望みですか」「ごめんなさーいーいーい！」

百合姫「続いてのコーナーは」

鈴「本音ぶつちやけコーナー！！」

ふあやて「え、えと、い、いえーい？」

ヘイト「本音ぶつちやけコーナー」では視聴者さんから送られてきた質問に答えます」

なによは「うう……酷い目に遭ったの……」

百合姫「わーお、なによは。コゲコゲ……最初の質問は「優さんの友達」さんから「もしも優さんラバーズが大人しくなったら全員と付き合いますか？」カモン！ 優！」

優「えっと、流石に全員と付き合うのはどうかと思う……」

鈴「と言う事は優の本妻を巡って血みどろなバトルが始まるわけだ
www」

百合姫「そして読者が「ハーレムで襲われるwww」的な意見がでたらArishiaさんは二つ返事でやるとwww」

優「ありえそうで嫌だ……それじゃ、俺はこれで」

鈴「あ、待った。もう一枚もお前宛。「胃痛持ち」さんから「最近一番貞操が危なかった時はいつ頃ですか？ その時の相手は誰ですか？」……だつて」

優「……性懲りもなくこういつのを送るってことは覚悟はできてるな？ 今回はレイに加えてこの夫婦も送ってやろう」

百合姫「久遠に会えるしいつか」

鈴「楔に会えるからおk」

なによは「（私もちよつと嫌な感じしたからS L Bなの!）」

ヘイト「（私の椅子を侮辱されたことにはなんとなくムカついたからザンバってサンダろう……）」

ふあやて「（ふえええええ!?!? 「胃痛持ち」さん、死なないで……）
~~~~~!?!?!）」

優「さて、今度こそ帰る」

百合姫「乙」

鈴「てか、この為だけに来たんだWWW」

ヘイト「質問のほとんどが彼関係だけだったからです」

なによは「人気者なんだね」

ふあやて「えと、最後のコーナー……」

百合姫「ん? どした? ふあやてちゃん?」

鈴「進行の紙を見て止まったけど……」

なによは「えーつと……え、?」

ヘイト「シヤマルの料理どれでしょ」（優が悶絶する料理ver）  
……」

百合姫「鈴! 今すぐ優を連れてきて!」

鈴「駄目だ！ このスタジオから出ることも、逆に入ることもできない！！！」

なによは「っ……つまり？」

ヘイト「デッド・オア・アライブ」

ふあやて「（あまりの事態に魂が抜ける）」

百合姫「くっ、仕方ない……死して屍拾うもの無しいいいい！！！」

鈴「俺、この戦い<sup>コナ</sup>が終わったら、結婚するんだああ！！！」

なによは「悪魔らしいやり方で勝ち残ってあげるからああ！！！」

ヘイト「ここの責任者、嫌いです hate だけに……そして

ザンバります！！！」

ふあやて「……あれ？ どうしたんだっけ？ みんな寝てるのかな？ ……お腹しゅいた。一個だけ残っているこれ、食べよ……ふわ

あ、とつてもおいしいでしゅ！ 今日はいいいことありしよつです〜  
！ あ、お別れの言葉でしゅか？ しゅ、しゅみましえん！ えー  
つと……」

百合姫「……」

鈴「……」

なによは「……」

ヘイト「……」

ふあやて「（一人でやっちゃっていいのかな？）この放送は「魔法少女リリカル……なんとか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャだったりキャラ崩壊していても一切クレームは受け付けましえん！！ あ、最後に啗んじやいましたあ〜……」

第四回「残り物には福がある!？」(後書き)

さあ、ラジオ三人娘出ましたね……

他に出して欲しいキャラはいますか？

え？ ゆう？ だって人気ないし……優の方が人気がありますからね！

……ラジオの世界では人気がすべてなのですよwww

第五回「悪因悪果因果応報」(前書き)

漢字ばかりで難しく見えるかもしれないけど最後まで見ればなんとなくわかるよ！

多分

## 第五回「悪因悪果因果応報」

優「はい、始めました。五回目のラジオ放送、司会は暁優と」

ヘイト「この椅子は誰にも譲りません」

優「……紹介しろよ」

ヘイト「断固拒否します」

優「もういいや、ヘイト・テストロッサです」

ヘイト「人の名前を勝手に使うなんて万死に値します。よって私を膝の上に乗せながら頭を撫で続けなさい」

優「意味が分からないって……」

ヘイト「腕を常に動かすのは少し疲れます……じわじわ疲れさせてあげましょう」

ニユイ「はぁ……暁ニユイです」

優「なんでその名前になったんだ……」

ニユイ「YUI NYUI。でアンニユイのニユイになりました」

優「いやいや！ どう考えてもその繋がりはおかしい！」

ニユイ「すみません、そのノリにはついていきません……はぁ」

優「えっ！？ 駄目だし！？ 駄目だしされるの！？ 俺！？」

ヘイト「さっさと進めてください。これからなにはにザンバリに行く予定があるんですから」

優「物騒だ……とりあえず、ゲスト以外はこれで揃ったん「すみましえん！ 遅れました！」ああ、うん。ふあやてちゃんね」

ふあやて「どうして分かったんでしゅか！？」

優「（さすがに噛んでるからは酷いかな……？）ま、まあ、なんとなく分かったんだよ」

ふあやて「ふえ！？ しょ、しょれつて！？（一心同体つてこて）  
「私の椅子は渡しませんよ？」ひゃああああ！？ ごめんなしやい、  
ごめんなしやーーーーーい！！！！」

ニユイ「若いつていいですね」

優「いや、その姿で若いことの素晴らしさを語られても……とりあえず今回のゲストを呼びましょう。「なっぺ」さんの作品「魔法少女リリカルなのは（The Fantastic Story）」から来ていただきました、自己紹介をしながらどうぞ」

吼太「えつと吉谷吼太。この作品の主人公で色んな能力を使って戦う転生者だ。でも、魔力量は神様の手違いで最低のFマイナス。周りにいる女性の大半が痴女という、幸せなのか不幸なのか分からない環境にいる。いや、間違いなく不幸だな……猪突猛進タイプで、一度熱くなると周りを気にせず、絶対に一つのことをやり通すとい

う、自分でも短所であり長所でもあると思う部分を持っている……かな？」

リーム「リームだよ！ コータを主とするユニゾンデバイスでコータに救い出されてから、コータ一筋の思考を持つようになってるんだ。たまに、妄想の世界から抜け出せなくなる凄<sup>わる</sup>い癖があるよ。魔力はAだけど、複数のリミッターをかけているから、実際はそれ以上に魔力があるんだ。氷結系魔法が得意だよ！」

ベス「吼太を転生させた張本人で見た目がまんまスライムベスなので、ベスと呼ばれていますがベスではありません。誰ひとり信じたくれないですが……、うっかりミスを多発してしまいますが、決してダメな神様と言っわけじゃないんです。余談ですが、神様としての担当は冥界です」

優「えっと、これで全部かな？ それじゃあ、小説紹介「ふっふっふっ、私を忘れてもらっちゃあ、困る」え？」

なっぺ「とう！ 天が呼ぶ地があっ！？」

吼太「すまん。ゴミが入ってきたみたいだ」

優「ゴミって……えっとこの人は？」

吼太「『魔法少女リリカルなのは』The Fantastic Story』の作者の「なっぺ」。何かと好き勝手言っでは誰かに攻撃される馬鹿。修学旅行とかで、誰かにいたずらしようとして起きてようとしたのに、寝ちゃって逆にいたずらされるようなやつ。いたずらはされるよりする方がいいが、現状はされる側になるほうが圧倒的に多い。って言うアホだ」

優「いやいや！ 言いすぎだから！ 作者さんも少し大切にしようよ!？」

なっぺ「お、おせんべえあげるからやめて……」

リーム「それ、私のネタ！（ドゴツドゴツ!）」

吼太「人のネタを使ってんじゃねえ!!（ドガツドガツ!）」

ヘイト「私もザンバる（ちゃき）」

ふあやて「ふわわわわわわわ!! ニユ、ニユイさん！ 止めてく  
だしい!」

ニユイ「アンニユイな気分なのでお断りします」

優「さつきからずっとそうじゃん!! ええい！ 仕方ない！ さつさと進めないと、シャマルの料理と【バカとテストと召 獣】の姫さんの料理を魔法カード【超融】で合体したものを理想的にしたもん（要は、俺でもヤバイ）を食わせるぞ!？」

全員「……」（ぴた）「……」

優「すごい……【バカとテストと召喚獣】を読んだことないから路さんの料理を知らないけどとにかくすごい……」

ヘイト「何をしていますか？ 早く進めましょう」

優「あ、ああとりあえず小説紹介だな」

なっぺ「ならば作者である私が……」「食中毒になって死んだ少年、吉谷吼太はスライムベス……もとい神様に転生させてもらえることに！しかし、その神様がまたうつかり屋で……新しい観点で描かれる（はず）のリリカルワールド！吉谷吼太は平和な世界を創れるのか！？」「今後の展開にこうご期待！！」って感じで

ニユイ「はあ、まだラジオは終わらないんですか？」

ヘイト「早くしないとザンバリます」

ふあやて「ひゃい！？最初のコーナーは……」

リーム「リリカルなんとか裏話」

吼太「このコーナーでは本編では出なかったいわゆる没シーンを公開します」

ベス「はつきり言ってネタです」

優「……もう、ゲストだけで出来るんじゃないの？」

ヘイト「生意気すぎて嫌いです hateだけに……」

ふあやて「うう……お役に立てじゅ、ごめんなしゃい」

なっぺ「（軽く罪悪感……）えと、今回はこちら！」

訓練が一段落して俺達は一旦集まることになった。

「はい、じゃあ、午前の訓練終了!」

そう言っただけで集まってきたフォワードメンバーはほとんど虫の息だった。

「……お前ら何をした？」

「それを言うなら優が何をしたんですか……エリオ、ほとんど死んでますよ?」

「あ、いや、ガードウィングはとにかく速さが基本だから、ダッシュと停止を交互に織り交ぜたやつを中心にアップしてあとは俺の攻撃を少しづつ避けることに集中させた」

「だ、大丈夫です。兄さんの愛の鞭ですから!」

色々突っ込みたいけど確かにやりすぎた感はないからここは我慢しよう。

「エリオ君ずるい! 私もガードウィングやる!」

「お姉ちゃんも教えて欲しいなあ(ハアハア)」

突っ込んだら……駄目だ……

「優君、二人つきりで訓練しよう?」

「し、仕方ねえな! あたしも付き合っただけよ!」

突っ込んだら……

「兄さんは僕を愛してくれているから練習に付き合ってくれます!」

『それは聞き捨てなりませんですよ！ 優さんが一番好きなのはリンです！！』

いきなり通信が開いてリンが妙な言葉を口走ってきたけど突っ込んでいじゃないけな。

『何を言っているんですか？ 優が好きなのは私です』

『僕だよ！』

『優のような素晴らしいものには我こそがふさわしい』

『優を守るのは私だけで十分です』

「お前ら……」

うん、出来るだけ頑張った。

でも出来るだけってことは出来ないこともあり得るわけであって……

「少しは静かにしやがれえええ！……！！！」

『イミテーション・バスター』

優「流石に今後には支障をきたすと思った」

訓練が一段落して俺達は一旦集まることになった。

「はい、じゃあ、午前の訓練終了！」

そう言って集まってきたフォワードメンバーはほとんど虫の息だった。

……お前ら何をした？

「それを言うなら優が何をしたんですか……エリオ、ほとんど死んでますよ？」

「あ、いや、ガードウィングはとにかく速さが基本だから、ダツシユと停止を交互に織り交ぜたやつを中心にアップしてあとは俺の攻撃を少しずつ避けることに集中させた」

「だ、大丈夫です。兄さんの愛の鞭ですから！」

色々突っ込みたいけど確かにやりすぎた感はないからここは我慢しよう。

「エリオ君ずるい！ 私もガードウィングやるー！」

「お姉ちゃんも教えて欲しいなあ（ハアハア）」

突っ込んだら……駄目だ……

「優君、二人つきりで訓練しよう？」

「し、仕方ねえな！ あたしも付き合ってやるよ！」

突っ込んだら……

「それに私は優の宿舎に忍び込んで寝込みを襲ったんだからー！」

「……は？」

ちょっと待て、今聞き捨てならないことを言われなかったか？

「そんなの私だってもう何回もやってるよー！」

「私もですー！」

「僕だつて!!」

ちよつと待て、明らかにおかしいだろ。

まずフェイトは俺の姉だし、キャラは明らかに女の子ってレベル。  
エリオにいたつては論外だ。

「この中で合法的に襲えるのは私だけなんだよ！ フェイトちゃん  
!!」

と言つよりなのは……

「襲つに合法もクソもあるかあああ!!!!」  
『エクスカリバー』

吼太「これは……酷いな」

優「作者も直前まで悩んだけど流石に不味いつて判断したらしい」

ベス「でもここで出していいんですか？」

優「このラジオは本編と関係ないんだよ!!」

吼太「必死だな……」

リーム「続いているコーナーは……」

ふあやて「本音ぶつちやけコーナーでしゅ!!」

ニユイ「はあ、このコーナーでは視聴者さんから寄せられた質問を答えr……もういいや」

優「最後まで言おうよ!？ えと、視聴者さんから寄せられた質問を答えるコーナーです!」

吼太「んじゃ、最初は「女神様」さんからの質問「神様の出番ってこれからあるの?」こっちの作者さん、どうなんですか?」

作者「完全オリジナルの四期でやるかもしれない……と言ってもS tSまでしか見てないからやるとしたらかなりぐちゃぐちゃになる気がするけど……」

リーム「次は……これ! 「いつも貴方の真後ろに」さんからの質問「もしも優が最初になのは側についてたらどうなったの?」……そう言えば主人公サイドじゃなかったんだっけ?」

優「ん、右も左も分からない状態だったからな……フェイトのこ とをちゃんと知らなかったらフェイトと敵対してたかもな。両方の 事情をちゃんと知っていたらフェイト側につくけどな」

なっぺ「ついに……ついに戦いの時が来た!」

優「半ば、このコーナーがあるの決定してるからな……」

ヘイト「このラジオを始めた人、嫌いです hateだけに」

ニユイ「はあ、なんでこんな面倒なことを……」

リーム「そもそもこんな物を送りつけた人のせいです」

吼太「(ちらつ)」

なっぺ「……(目を逸らす)」

ベス「神たる私の力を持つてすれば誰が原因かが分かります」

ふあやて「だ、駄目でしゅよ！ 公平にみんな食べないと……」

ベス「あ、それこの中で唯一の大当たりですよ？」

全員「「「「「……」「」「」」

ふあやて「えつぐ……ひつく……」

優「あ、ああ！ ふあやて！ 俺のと交換しようか！」

ふあやて「ふえ？ ひつぐ……でも……」

優「いいから、いいから！ 前よりも胃が強化されてるから大丈夫になっただよ！」

ふあやて「(ぱああああ)ありがとうございますじゃいましゅ！ じゃあ、こちらはいただきますね！ ん、おいしいでしゅー！」

ニユイ「はあ、今回は大当たりが一つだけだったみたいだからな……安心していただくでしょう」

リーム「うう……優さん、漢です……」

ヘイト「あなたのこと……少しだけ嫌いじゃなくなりました」

ベス・吼太「（じーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー）」「」

なっぺ「う……ゆ、優君、取り換えよつか。いえ、むしろ取り換えさせてくださいー！」

優「え、いや、でも……」

なっぺ「いただきますー！」

優「あ……」

なっぺ「……（ばかり）」

吼太「綺麗な顔してるだろ？ 死んでるんだぜ？ それで……」

ベス「あなたの尊い犠牲は忘れません」

ヘイト「無事に終わったことですし締め言葉にいきましょう」

全員「……この放送は「魔法少女リリカル……なんとか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャだったりキヤラ崩壊していても一切クレームは受け付けませんー！」「」「」

おまけ

ゆう「遅れたああ!!!! くそ、やっぱり収録は終わったか……ん  
? 料理? なんだ、みんな俺の分を取っといってくれたのか……い  
っただっきまーーす  
」

## 第五回「悪因悪果因果応報」(後書き)

さて、もうゲストで一回も出てない人はいませんか？

もしいらっしやったら、出していいキャラが話す自己紹介と小説紹介があればやらせていただきます。

第六回「かゆ うま!」(前書き)

今更だけど自己紹介してないのに名前は出てるって変だと思った。

## 第六回「かゆ うま!」

ふあやて「えと、リリカルラジオはj」ふあやてちゃーん「ふえ!?!」

ヘイト「ザンバります」

??「ギヤーーーーー!!」

優「ゲストのフライングって初めてだな……あ、司会の暁優です」

ヘイト「呼ばれてましたっけ？」

ふあやて「えと、えとえと、私が……」

ヘイト「渡しませんよ!」

ふあやて「ふええええええ!?!」

優「いつから俺は所有物になった! てかザンバられた人大丈夫か!?!」

ヘイト「峰打ちです」

優「峰ないよね?」

ヘイト「生意気です……膝の上に乗せて頭などで命令します!  
あなたの事が嫌いですから hateだけに!!」

優「はいはい」

ふあやて「(いいなあ〜……)」

??「もういいですか?」

優「あ、どうぞ」

久遠「えつと、はじめまして、久遠です。『チートじゃ済まない』  
に出演している妖狐だよ。子狐にも子供にも大人にもなれるよ。雷  
系の技が得意で、主人公である一条要の妹分だよ。あっ、それとよ  
く、真の主人公兼ヒロインって言われる……」

優「えと、もしかしてさつきザンバだったのって要さん?」

久遠「ううん、作者」

優「ええっ!? なんで!? 普通ここってヒロインと主人公が出  
ない!?!」

??「それは久遠が真の主人公だからさ! と言っわけでふあやて  
ちゃんを抱き締めさせてえええ!!」

ふあやて「ひっ!?! (優の陰に隠れる)」

ヘイト「ザンバります」

久遠「雷どーん!」

??「嫌あああああ!?!」

久遠「悪は滅びた」

優「滅ぼしちや駄目でしょ!?!」

ヘイト「さつさと最初のコーナーいきます」

ふあやて「ひつく……えっぐ、怖かったでしゅ……」

優「（最近、グダグダじゃないか？ このラジオ……）」

久遠「リリカルなんとか裏話」

優「あ、作者さん無視してやっちゃうんだ……」

ヘイト「このコーナーではいわゆる没シーンを公開するコーナーです」

ふあやて「最初のコーナーはこちらでしゅ!」

優「……今の内に気づけしておこう」

証明するんだ……特別な才能やすごい魔力がなくなつて、一流の隊長達がいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって！  
橙色の誘導弾が私の周りを埋め尽くす。

「私は……ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって  
!」

スバルが囷になってくれていた間に私は一気に限界まで準備を整える。

『ティアナ!? 四発ロードなんて無茶だよ! それじゃ、ティアナもクロスミラージュも!』

「撃てます!」

『イエス』

「クロスファイヤー……」

展開した十発を越える誘導弾を操って、

「シューート!」

ガジェット達に直撃させた。

「だあああああ!!!!」

誘導弾に加え、直接撃ち込むことで手数を増やして全機落とそうとするが、一体のガジェットを狙った球が逸れ、その先にいたのは……

「え!?!」

嘘!? 狙いが逸れた!?

私の撃った弾はそのまま囷役をやっていたスバルを目指し……直撃した。

「う……そ……?」

私は今日の前で起こったことが信じられず呆然としてしまっが……

『ティア！ 私は大丈夫だよ！！』  
『スバル！？』

今で晴れぬ黒煙に姿は見えないがスバルからの念話が飛んできて私は安心した。

『だけど……』

スバルが何かを言おうとした瞬間、スバルを包んでいた黒煙が晴れた。

少し考えれば分かるはずだった。

あの誘導弾は別に目くらましよこのやつじゃないんだから……直撃しなければ黒煙なんて起こり得ないことを……

「スターズ分隊はさがれ」

「え？」

「おい！？ 優！？ その腕どうしたんだよ！？」

黒煙の中から出てきたのは無傷のスバルと左腕を力なくだらりと垂らした暁優二等空佐だった。

「問題ない。片腕なくなった程度で倒されるほど弱いつもりはないしな……そして、もう一回言う。さがれ、ティアナ、スバル」

久遠「こうなったら大変だった……」

証明するんだ……特別な才能やすごい魔力がなくなつて、一流の隊長達がいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって！  
橙色の誘導弾が私の周りを埋め尽くす。

「私は……ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」

スバルが囷になつてくれている間に私は一気に限界まで準備を整える。

『ティアナ！？ 四発ロードなんて無茶だよ！ それじゃ、ティアナもクロスミラージユも！』

「撃てます！」

『イエス』

「クロスファイヤー……」

展開した十発を越える誘導弾を操って、

「シューーート！」

ガジェット達に直撃させた。

「だあああああああ！！！！！」

誘導弾に加え、直接撃ち込むことで手数を増やして全機落とそうとするが、一体のガジェットを狙った球が逸れ、その先にいたのは……

「え！？」

嘘！？ 狙いが逸れた！？

「させるか！」

高速で近づいてきた存在がスバルの前に立ち、誘導弾を弾く。

「暁優……三等空佐……」

「大丈夫か？ スバル」

「あ、えと……」

「へえ、あたしの心配はなしか？」

誘導弾の弾いた先にいたのはこっちに来ていたヴィータ副隊長だった……何故か顔が暗くなっていて良く見えないけど明らかに嫌な予感がする……

「ヴィ、ヴィータ？ だ、大丈夫か？」

「お陰様で誘導弾が直撃だ……誰がこんな無茶をしたのか素直に言えば他のやつは許してやる」

「（バツ！）」

つて、あんたたち少しは躊躇い位見せなさいよ！？

「そっか、ティアナか……後であたしの部屋に來い」

死刑宣告された。

兄さん……ごめんね？

雨季「はじめまして（？） 、雨季です。『チートじゃ済まない』の

作者をやっています。寝癖で眼鏡の大学生さ。男の子も女の子も男の娘も大好きだよ。もちろん、普通の女性もね。特技は妄想。だから小説なんて書いてるんだがね」

久遠「……………」

ヘイト「何をしたの？」

優「気つけをやってみただけどちょっとミスったっぽい……………これが「雨季」様のキャラだとは思わなくてくださいね!？」

ふあやて「ひ、必死でしゅね……………」

雨季「ふあやてちゃん、おつもちかえり……………!?!?!」

ふあやて「ふえ!?!?」

久遠「雷光百華!?!」

雨季「ぎゃあああああああ!?!?!?!」

優「く、久遠ちゃん!?!? やりすぎだよ!?!」

雨季「……………あ、あれ? なんか気持ち良くなってきたよ?」

優「うわああああ!?!? 「雨季」様が色々不味いことになりそうなので次のコーナー行きます!?!」

ヘイト「気持ち悪くて嫌いです hateだけに」

雨季「もつと罵ってください!」

ヘイト「…………ぐすっ」

優「へ、ヘイトおお!? 泣きたいのは分かるけども!」

雨季「ふあやてちゃんとヘイトちゃんを両方とも…………」

ヘイト・ふあやて「(一瞬で優の影に隠れる)」

優「(久遠ちゃん、強引に次のコーナー行って誤魔化そう!)」

久遠「(はい!) 本音ぶつちゃけコーナー!」

優「はい! そう言うわけで質問に答えます! 「雨季」様! ハガキを選んでください!」

雨季「ラジオネーム、「雨季」さんからの質問「ふあやてとヘイトをください」です!」

優「それは質問じゃなくてお願いです!! 大体、ハガキ読んでないじゃないですか!」

雨季「はあ、仕方ない。ラジオネーム「誇りある荒らし」さんからの質問です「もしも優君がまーちゃんと結婚したときラバーズはどんな反応をとるか?」だそうです」

優「何だか狙った感が拭えないけど…………まあ、いいや!」

久遠「それでは、とあるユニゾンデバイスさんに来ていただきましたまし

た！ ユイさんどうぞ……っとYさんどうぞー！」

優「思いつきり名前言っちゃったあああ！？」

Y「えつと……優が幸せならいいです。でも、私のことも見て欲しいかなって思ったり……あ！ いえ！ そんなのは過ぎた望みって言うのは分かってるんですけど……えと／／／／／」

久遠「パニくっちゃって名前出てきたことに気がついてないね……次はヤンでる姉妹！」

F「優が結婚できるのは私だけだよ？」

A「お兄ちゃんを誘惑するような意地汚い女共はみぐんな殺しちゃう……あは」

優「怖い！ 超怖い！！」

久遠「最後にヤンでるネコさん……ヤンネコさんに来ていただきませす！」

優「四人中三人がヤンでる！？ 色々危ないんじゃないの！？」

ヤンネコ「ニヤ〜……優は私のもの……奪い取るような奴がいたら喉を食い千切って、腹を引き裂いて、目玉を掬ってあげる……」

優「一番こええ！！ てかネコ関係ないし！！」

雨季「次は「ヨシダ」さんからの質問です「ユイは優を押し倒してヤっちゃおう気はありませんか？」だってさー！」

ユイ「ゆ、優を、お、押し……きゃあああああ……!!!!!!」  
（逃走）」

優「……なんでこんな重い質問ばつかなの？」

久遠「私も優のこと好きだよ？」

優「なっ!?!」

ラバーズ「（ギロツ!）」

久遠「優しくとつてもいい友達だよ!」

優「あ、ああ、うん。そっか（ホッ）」

ラバーズ「（優の魅力が分からないなんてお子ちゃまだ……）」

優「なんか理不尽なことを思っている気がするけど続いているのコーナー」

雨季「本日は趣向を変えて「かゆ うま料理どれでしょ」……え？」

優「……」

久遠「……?（良く分かっていない）」

ヘイト「（分かっていない）」

ふあやて「（おかゆがおいしいのかな？）」

雨季「とりあえずこの料理を捨てて、それを捨てるなんてとんでもない！」これだあああ！！ 絶対にこれだあああ！！」

優「他のもかなり歪だけど進行用の紙を見る限り、まともらしいな」

久遠「うえ〜…………どう見ても埃だよ〜」

ヘイト「…………鉄塊？」

ふあやて「シユライム？」

優「消し炭だけど…………なんでステーキなんだ？」

久遠「おいし〜」

ヘイト「見た目は嫌いですが hateだけに」

ふあやて「hateとか関係ない気が…………」「なにか？」「ごめんなしやい〜」

雨季「…………」

優「雨季様…………これを食べて元に戻ってください」

雨季「私、元通りアル！ これ以上ないくらい健康体ですヨ〜！？」

久遠「（がしっ！）」



第六回「かゆ うま!」(後書き)

色々、ごめんなさい……なんか頭がアレな事になってました……

試験勉強なんて嫌いだぁー!!

第七回「料理？　いいえ、さんです」（前書き）

さんです、さんなんです！

意味が分かりませんね……すみません、テスト勉強で頭が残念な事に……

第七回「料理? いいえ、さんです」

なには「リリカルラジオ始まるの!」

ヘイト「テンションが高くて嫌いです hateだけに」

ふあやて「あうう……ごめんなしやい……」

ヘイト「いちいち謝るのも嫌いです hateだけに」

なには「無茶苦茶なの……」

ヘイト「うるさいですよ? 私より人気がないのに……」

なには「酷過ぎるの! ラジオ三人娘、一番人気の高町なにはと!」

ヘイト「私のように人気のある人は紹介など不要です!」

ふあやて「八神ふあやてでしゅ! あ、ご、ごめんなしやい……あう……」

ゲスト「(濃いなあ……)」

なには「あ、ゲストさんの紹介です! 「緋水」様の作品「魔法少女リリカルなのは」とあるデュエリストの原作ブレイク!」からのゲスト……」

緋水「はじめまして緋水です。まあこんな感じですが一応小説を書

いています。まあ小説に出てくるけどまだそんな重要なキャラじゃ無  
いんだけどね。色々な所でちょっかい出すんでよろしく」

ヘイト「出さなくていいです」

緋水「ぐはっ!」

ふあやて「へ、ヘイトちゃん!? しょんなこと言っちゃ「なに?」  
ひう!! な、何でもないでしゅ!」

なによは「いきなりそんなことを言うのは失礼なの!」

ヘイト「必ず一回は駄目だししないと気が済まないから……」

優「止めんかい! (ゴスツ)」

ヘイト「……痛い、仕方ないから罰として私を膝の上に乗せなさい」

優「いつもそれだから今回は無しだ……ふあやて、おいで」

ふあやて「ふえ!?!」

ヘイト「え……」

なによは「私もー!」

優「はいはい、片方ずつでいいか?」

ヘイト「……ゴスツ」

ふあやて「ヘイトちゃん……」

ヘイト「……何ですか？」

ふあやて「あの……いいよ？ 場所かわろ？」

ヘイト「……そこまで言うなら仕方ありません、特別ですよ!？」

優「スタジオ内で走るな……つか、半ば脅してるじゃねえか……仕方ない、ふあやて。肩車でいいか？」

ふあやて「ふええええええええええ!？」

緋水「驚くべきふあやての幸運スキル」

??「優も素でやってるからなあ……」

緋水「あ、来たんだ？」

??「むしろ俺が来ないと駄目じゃない？」

優「あ、それじゃあ、自己紹介を……」

なにはは・ヘイト「うー……（恨みの籠った視線）」

ふあやて「ふええええええええええ! ごめんなしゃい、ごめんなしゃい、ごめんなしゃい……!」

??「（ふあやて……不憫な）はじめまして朝倉貴哉です。緋水の書いてる小説「魔法少女リリカルなのは」とあるデュエリストの原

作ブレイク！」の主人公しています。とあるバ神のせいで殺されて魔法少女リリカルなのはの世界に紛れこんでしまいました。まあですがバ神から貰った遊戯王のカードを扱い原作ブレイクをしようか。みたいなノリで始まってます。そんな進んでいませんがよろしくお願いしますね」

「???」私も自己紹介しようか」

貴哉「本編に出てないのに？」

「???」(無視)はじめましてだな。ハテナだ。ハテナって言う名前何だが実際名前が無いからこんな名前なんだよ。ついでに俺の出番は最終回らへんにしかない。まあ能力を喋るとするなら「無と無限と時を操る程度の能力」だな。そして全ての神の上の存在である「時の管理者」つー役職についてる。まあ実際俺の出番がほとんど無い理由が強すぎるからだな。それまでは多分こちらの感想に現れるな」

優「えと……これで全員？」

緋水「そだね、小説紹介していいかな？」

ヘイト「駄目だ」はい！ どうぞ！！」もがっ！ もがもが！！」  
手を……手を放しなさい！」

緋水「えつと……いいの？ それじゃ、ええと一応俺の書いてる小説「魔法少女リリカルなのは」とあるデュエリストの原作ブレイク！」今はまだ本編に入ったばかりですがよろしければ見てくださ  
い」

ふあやて「えと、しよれでは！」

貴哉「リリカルなんとか裏話」

ハテナ「このコーナーでは本編では明かされなかったシーンが見れるぞ」

緋水「今回はこれ！」

次の日からの練習……私は一人で始めるつもりだったけど、スバルも一緒にやってくれるって言うてくれてすごく嬉しかった。

……と言っても本人を前にそんなこと言ったらムカつく反応されるに決まっているから絶対に言わないけど……

「で？ ティアはどうしようと思ってるの？」

「短期間でとりあえず現状戦力をアップさせる方法　うまくいけばあんたとのコンビネーションの幅もグッと広がるし…… エリオやキャロのフォローももつとできる」

「うん！ やろ！ ティア！」

私達はなのはさん達の教導に加えて早朝訓練や深夜訓練を組み込んでいった。

まずは、急いで技数を増やさないといけないんだ……幻術は切り札にはならないし、中距離から撃ってるだけじゃ、それが通用しなくなった時に必ず行き詰まる。

私のメインはシャープシユート……

兄さんの教えてくれた精密射撃だけじゃ駄目なんだ！

行動の選択肢を増やして、もっと……もっと強く！

例え少しぐらいやり方が乱暴でも強くならなくちゃいけないんだ！

スバルも本当によく付き合ってくれるし、クロスミラージユだって今までだいぶ酷使させてきちゃった……明日の模擬戦が終わったらシャーリーさんに頼んでフルメンテして貰おう。

私は、最後にスバルになのはさんに逆らうような真似をしているけどいいのかって聞いちゃったけど、スバルは笑いながら、

「強くなる為の無茶なんだから許してくれるよ！ それに……なのはさん優しいもん」

そう言えば、なのはさんに空港で助けられて魔導師になったのよね……ある意味私がスバルを裏切るような真似させちゃったのか。

「スバル、明日の模擬戦が終わったらちよつとだけ何か奢ってあげるわよ」

「え、ええ！？ い、いいよ、別に……！」

「涎拭いてから言いなさい」

スバルは慌てて口元を拭うがそれを見て思わず笑ってしまう。

大丈夫だ……明日は、きつとうまくいく。

優「スバルだし……」

次の日からの練習……私は一人で始めるつもりだったけど、スバル

も一緒にやってくれて言ってくれてすごく嬉しかった。

……と言っても本人を前にそんなこと言ったらムカつく反応されるに決まっているから絶対に言わないけど……

「で？ ティアはどうしようと思ってるの？」

「短期間でとりあえず現状戦力をアップさせる方法　　うまくいけばあんたとのコンビネーションの幅もグッと広がるし……エリオやキャラのフォローももっとできる」

「うん！ やる！ ティア！」

私達はなのはさん達の教導に加えて早朝訓練や深夜訓練を組み込んでいった。

まずは、急いで技数を増やさないといけないんだ……幻術は切り札にはならないし、中距離から撃ってるだけじゃ、それが通用しなくなった時に必ず行き詰まる。

私のメインはシャープシュート……

兄さんの教えてくれた精密射撃だけじゃ駄目なんだ！

行動の選択肢を増やして、もっと……もっと強く！

例え少しくらいやり方が乱暴でも強くならなくちゃいけないんだ！

スバルも本当によく付き合ってくれるし、クロスミラージュだって今までだいぶ酷使させてきちゃった……明日の模擬戦が終わったらシャーリーさんに頼んでフルメンテして貰おう。

私は、最後にスバルになのはさんに逆らうような真似をしているけどいいのかって聞いちゃったけど、スバルは笑いながら、

「強くなる為の無茶なんだから許してくれるよ！ それに……なのはさん優しいもん」

そう言えば、なのはさんに空港で助けられて魔導師になったのよね……ある意味私がスバルを裏切るような真似させちゃったのか。

「スバル、明日の模擬戦が終わったらちよつとだけ何か奢ってあげるわよ」

「本当！？ それじゃあ、食堂にある料理を全部食べてみたい！」

……破産しろと？

私は自分の財布の中身と相談した結果、翌日の模擬戦を休むことになった　馬鹿スバル。

優「……妙にリアルで笑えないな」

なには「次のコーナーに行くの……」

全員「……本音ぶっちゃけコーナー！」「……」

優「……珍しく揃った」

貴哉「珍しいこともあるね……」

緋水「よし！ 最初はこれ！ 「優さんの友達」さんからの質問！

「ティアナってその内優さんの手によって墜ちる？（恋愛的な意味合いで）」だってさ！」

優「墜チル？ 何ノコト？ ボク二八分カラナイナア〜？」

作者「読者が望むのであれば喜んでWWW」

優「作者……O H A N A S H I I しようか？」

ハテナ「向こうでO H A N A S H I I してる間に次の質問！

「ひれ伏せ変態共」さんからの質問！ 「リア充は一度爆死させて……お願い！ 後で頼んでおくよ！」

貴哉「頼むものじゃないよね！？ えつとじゃあ、質問じゃなかったからもう一個。「いつも貴方の真後ろに」さんからの質問。「ぶつちやけ優が記憶無くしたらラバーズはどうする？（性格は変わらない）」だ、そうです」

ラバーズ「……私が妻だってことを教えてあげる！」「……」

貴哉「……主人公、頑張れ！」

優「半ばお約束となったコーナーだ」

ハテナ「作者は？」

優「ゼロ距離スターライトブレイカー（殺傷モード）を撃つといったからしばらく起きない」

緋水「（怒らせちゃ駄目だな……）えつと、今回は普通にシャマルの料理？」

貴哉「もはや、それが普通と言えるぐらいのカオスぶり……」

優「ネタが来たら使うから……」

ヘイト「もう嫌です……」

なによは「うう〜」

ふあやて「これでお別れでしゅね……」

ハテナ「何気にふあやてってこのコーナーで無傷なんだよね……」

緋水「となると被害は俺達か……ジャンケンで負けた人が全部食べるってことで！」

優「……その場合、死んでも一切文句は言いませんという誓約書が必要になるな……」

貴哉「否定できないね……」

ハテナ「誓約書なら持つてるよ？」

ヘイト「いらぬ所に手が届きますね……嫌いです hate だけに」

なによは「負けなければいいんだ、負けなければ！」

ふあやて「ふええええ！？ ジャンケンに負けたら全部食べりゅのお〜！？」

緋水「じゃーんけーん……」

ふあやて「あわわわわ！」

全員「「「「「ポイ!」「」「」

緋水「……(ぱー)」

優「……(ぱー)」

貴哉「……(ぱー)」

ハテナ「……(ぱー)」

ヘイト「……(ぱー)」

なによは「……(ぱー)」

ふあやて「……(ぐー)」

全員「「「「「」

ふあやて「……ぐすっ」

優「あ、あー! ふあやて! 泣かないで!」

貴哉「最低だな……緋水」

ハテナ「あり得ない……」

ヘイト「鬼畜すぎて嫌いです hateだけに……」

なによは「ふあやてちゃんファンから殺されるの……」



第七回「料理？　いいえ、さんです」（後書き）

もうなんか色々いっぱいいっぱいなんです！

本当にすみません！！

なんでやってるのかなあ……あ、折角なのでネタの為にラジオで出てきたキャラの人気投票します。

一人当たり二票でお願いします。

やって欲しいシチュエーション等があれば書き込んでくださればやるかもです。

第八回「渡る世間は ばかり」(前書き)

○○には何が入るでしょう？

もしかしたらあなたを表す言葉が……(おい

## 第八回「渡る世間は ばかり」

なによは「リリカルラジオ！ 始まります！」

「……………」

なによは「あ、そうか。前回のアンケート結果からか……………人数も少なかったので全員発表です！ 第三位！」

ゆう「俺の人气が有頂点に達したああ！！！」

優「意味が分からんぞ……………」

レイ「……………俺って出てないよな？」

なによは「第三位！ 一票でゆう、優、レイ！！！」

ゆう「俺ってばさいきょーね！」

優「票を入れてくれた人、ありがとう」

レイ「いいのかどうかはさておきサンキューな」

なによは「そして第二位！」

ヘイト「一位じゃないなんて不快です……………なでなでしてぎゅーってしなさい」

優「だから何で俺が……………」

なによは「うう……ずるい。第二位、一票でヘイト！」

ヘイト「あなたは私より人気がなかったのでより人気のある私の命令に従わなければならないのです」

優「へいへい」

なによは「それでは人気投票！ 栄えある一位は……高町なによは  
「ふあやてだな」にや！？」

ふあやて「ふええ！？ わ、わた、わたわた、私でしゅか！？」

優「うん、あ、あな、あなあな、あなたです。ちなみにダントツの  
七票」

ふあやて「ふええええええ！？ な、なにかの間違いでしゅか！？」

優「いや、ここまでダントツなのは作者も驚きだったらしい……ラ  
ジオ三人娘でトップ3をとると思っただらしいけど……」

なによは「ずー……ん」

レイ「あれが一票も来なかった奴の末路か……」

ゆう「人気ない、人気ないWWW」

なによは「S L B なの」

ゆう「ギにやああああ……」

レイ「南無」

優「折角一位になったんだから出来ることならやってあげるよ」

ふあやて「ふえ！？ え、えとえと……膝の上でぎゅってしてくだ  
さい」

ヘイト「！？」

優「ん？ それだけでいいの？ んじゃ、ヘイト降」「嫌だ」「嫌だ  
って……人気ある方の命令には従うんだろっが……」

ヘイト「やだやだやだ！」

優「あとでやってあげるから今はふあやてな？」

ヘイト「っう……」

ふあやて「あ、あう……駄目ならいいでしゅ……」

優「却下、後でもっと面倒なの頼まれたら嫌だからな。諦めて俺の  
膝の上でぎゅってされる」

ふあやて「ふえ！？」

ヘイト「生意気……あとでぎゅってだけじゃ済まさない……」

優「そんじゃ、最初のコーナーいっこうか？」

ゆう「うう……天国と地獄……」

レイ「自業自得だろ……」

なによは「……私もあんなことやこんなことしたかったの……」

ふあやて「えと、えとえと、リリカルなんとか裏話でしゅ！」

ヘイト「入れようかどうか悩んだもの、もしくは執筆中に浮かんだネタを暴露するコーナー……」

優「言い方悪いなあ……今回はこの場面！」

医務室から出て、ユイからもお説教を受け、後はせいぜいライトニングやマテリアルの奴らと模擬戦の日程を決めるぐらいの時に、突然アラートが鳴り響いた。

途中ではやてと合流しながら指令室に着くと、なのは以外の隊長陣が全員揃っていた。

「状況は!？」

「東部の海上に航空?型がそれぞれグループを形成して飛行中！」

「今のところレリック反応も付近に海上施設も見受けられません！」

「妙だな……何もない所にこれだけのガジェットが溜まるなんて……」

……

「誤反応かな？」

「可能性は0じゃないけど考えにくいわね……今までこんなことは一回もなかったんだし」

確かに……初めてガジェットと交戦した八年前からこんなことは一度もなかった。

そのことを考えると誤反応とは考えにくいか……

「だとすると……誘い？」

「だな……ガジェット達の親玉が誰だとしても恐らくは迎撃可能な戦力を探っておきたいんじゃないのか？ だからとりあえず俺達が気をつけるのは新しい手は晒さないこと。出来る限り今まで通り迎撃しよう」

「せやな、リミッター解除せえへんで隊長陣全員を出さへんでもいけるやろ……優君、フェイトちゃん、すずかちゃんで行ってくれへんか？」

はやての言葉に俺達は頷き、ヘリポートの方まで向かった。

途中、フォワード陣、マテリアル、そしてなのはを拾い、軽く説明しながら出撃準備を整える。

「今回の航空？型ガジェットは私と優隊長、すずか隊長で出撃するね」

「みんなはロビーで出動待機しててね？」

「そっちの指揮はアリサ、シグナムも足りない所はフォローしてやってくれ」

「任せなさい！」

「心得た」

フォワード陣もマテリアルも返事はするがティアナとなのはだけは少し渋っていた。

「それと……ティアナになのはは出動待機から外れる  
仲間内で喧嘩するような奴らに任せるつもりはない」

俺の言葉に隊長陣は目を逸らし、逆にフォワード陣やマテリアル、  
当の本人達は驚いたように俺を見つめてきた。

「俺達はチームで動いているんだ。くだらない自尊心や教導の強制  
の過程で動きを乱すような奴は邪魔なんだよ！」

なのは何も言わずに俯くがティアナは俺を睨むと、

「現場での指示や命令は聞いています！ 教導だってちゃんとさば  
らずやってます！ それに           あなたみたいな人殺しの言う事な  
んて聞く必要ない！！！」

思い出すのは……ティードが俺の目の前で死ぬ瞬間……

あのメンバーで一番歳の近かったティードとは一番仲が良くて死ん  
でしまうほどの重傷を負った時もその直前まで最後の願いで助ける  
つもりだった。

だけど

目の前で何かが殴られるような音に我に返る。

「心配するな、加減はした。……ティアナ、今の言葉を本心から言  
ったんだとしたら私はお前を許さんぞ           ヴァイス、もう出られ  
るな？」

「乗りこんでいただければすぐにでも！」

ヴァイスの言葉にフェイトとすずかが乗りこむ。

「暁、お前にもお前なりの事情があったことは分かる。それがなん  
なのかまでは私には想像もつかないが……私は、いや、少なくとも

お前を本当に理解している者達はお前を人殺しだなんて思っていない」

「……でも、俺は人殺しだよ。だから……その事實は受け入れなくちゃいけない」

俺の言葉にシグナムはイライラしながら、

「ええい！ 女々しい！ そんなんだから貴様は男性局員に告白されるのだ！」

「なっ！？ それは今関係ないだろ！？」

「黙れ！！ 私達が許すと言っているんだから少しは自信を持って！ そうしないのならばレヴァンティンの錆にしてくれる！！」

「無茶苦茶だ……！！！」

レイ「加減はしたそうです」

医務室から出て、ユイからもお説教を受け、後はせいぜいライトニングやマテリアルの奴らと模擬戦の日程を決めるぐらいの時に、突然アラートが鳴り響いた。

途中ではやたと合流しながら指令室に着くと、なのは以外の隊長陣が全員揃っていた。

「状況は！？」

「東部の海上に航空？型がそれぞれグループを形成して飛行中！」

「今のところリック反応も付近に海上施設も見受けられません！」

「妙だな……何も無い所にこれだけのガジェットが溜まるなんて……」

…」

「誤反応かな？」

「可能性は0じゃないけど考えにくいわね……今までこんなことは一回もなかったんだし」

確かに……初めてガジェットと交戦した八年前からこんなことは一度もなかった。

そのことを考えると誤反応とは考えにくいか……

「だとすると……誘い？」

「だな……ガジェット達の親玉が誰だとしても恐らくは迎撃可能な戦力を探っておきたいんじゃないのか？ だからとりあえず俺達を気をつけるのは新しい手は晒さないこと。出来る限り今まで通り迎撃しよう」

「せやな、リミッター解除せえへんで隊長陣全員を出さへんでもいけるやろ……優君、フェイトちゃん、すずかちゃんで行ってくれへんか？」

はやての言葉に俺達は頷き、ヘリポートの方まで向かった。

途中、フォワード陣、マテリアル、そしてなのはを拾い、軽く説明しながら出撃準備を整える。

「今回の航空？型ガジェットは私と優隊長、すずか隊長で出撃するね」

「みんなはロビーで出動待機しててね？」

「そっちの指揮はアリサ、シグナムも足りない所はフォローしてやってくれ」

「任せなさい！」

「心得た」

フォワード陣もマテリアルも返事はするがティアナとなのはだけは少し渋っていた。

「それと……ティアナになのはは出勤待機から外れる　仲間内で喧嘩するような奴らに任せるつもりはない」

俺の言葉に隊長陣は目を逸らし、逆にフォワード陣やマテリアル、当の本人達は驚いたように俺を見つめてきた。

「俺達はチームで動いているんだ。くだらない自尊心や教導の強制の過程で動きを乱すような奴は邪魔なんだよ！」

なのは何も言わずに俯くがティアナは俺を睨むと、

「現場での指示や命令は聞いています！　教導だつてちゃんとさばらずやっています！　それに　あなたみたいな人殺しの言う事なんて聞く必要ない！！」

思い出すのは……ティーダが俺の目の前で死ぬ瞬間……あのメンバーで一番歳の近かったティーダとは一番仲が良くて死んでしまうほどの重傷を負った時もその直前まで最後の願いで助けるつもりだった。だけ

目の前で何かが殴られるような音に我に返る。

「へぶっ！？」

「あ……」

「あ　じゃねえよ！！　何やってんの！？　シグナム！！」

「い、いや、加減はしたんだが踏ん張れなかったみたいでそのまま

壁に……」

「見ればわかるよ!? シャマル! 早く来て! シャマルー!」

ゆう「まあ、シグナムは腕っ節はありそうだしね!」

?????「紫電……一閃!」

ゆう「うばああああ!?!?!」

優「あほだ……」

レイ「んじゃ、質問コーナー行くぜよ!」

ヘイト「仕切られるのが生意気で嫌いです hateだけに」

ふあやて「えとえと、最初の質問はこちらでしゅ! 「ヨシダ」さんからの投稿……」なのは達と結婚しましょう!?そして後ろから刺されましょう!?」ってふええええ!?!」

優「ミッドは重婚不可(だと信じた)ので無理です! と言うよりラストが質問じゃなくなってます! 次!」

ヘイト「「道具屋・如月」さんからの質問! 「優の技は格好良いんだけど、なんか特殊な効果のある(エクスカリバーを除く)武器は作れるの?作れるとしたら制限はある?」どうなの」

優「格好良いかどうかは置いて構造の理解できるものなら可!

他人のデバイスでも調整してれば創れるけど武器って言うのが絶対条件だからユイやリンフォー스みたいにユニゾンデバイスは不可！ 要するに俺が理解出来て武器と思えるものが創りだす条件！」

レイ「後は……「洒落たシャーマン」さんからの質問「優とフェイト全力だとどっちが速い？」だとさ」

優「リミッター外した状態だとフェイトかなあ……本気出したら死ぬかもしれないし……あ、でもフェイトと同じソニックフォームになれば分かんない」

雨季「最後に「とある死神」さんからの質問「お姉さんみたいな人か、妹のように甘えてくる人……どちらが好きですか？」あ、ふあやてパス」

優「質問の内容が露骨になってきてないか？ えーっとそうだな……ってちよつと待て。なんで「雨季」様がここに？」

久遠「なんか、ふあやてとヘイトに逢いたい一心で来たみたいだよ？」

ふあやて「ひっ……いつ……（優に必死にしがみついて涙目状態）」

優「あー、えーっとふあやてはマジでヤバそうなんで、ヘイトd」「ふあやて！ もう交代の時間です！ 早くそこを譲りなさい！」おーい」

雨季「はあ……はあ……ふあやてちゃん……ヘイトちゃん……」

ふあやて・ヘイト「~~~~~ツ！！（声にならない叫び）」



潔があああ！！！！ わああああああん！！！！」

優「純潔って……そんな大げさな……」

レイ「雨季さんやり遂げた顔してるな……」

ふあやて「（ガクガクブルブル）」

ヘイト「本格的に対策を立てなくては……」

久遠「あれ？ これって何？」

優「ん？ ああ、今回シヤマルが諸事情で料理を作れなかったから「なつぺ」様の作品「魔法少女リリカルなのは ～The Fantastic Story～」の主人公の吼太君から貰ったロシアンルーレットチキン」

レイ「名前からして嫌な予感がするな……」

優「ここにある中で一本だけがこの世の全ての辛みを混ぜても足りないぐらい辛いけど、それ意外はピリ辛程度のもともおいしいフライドチキン……だって、普通だね」

久遠「そんな特殊な状態で普通って……」

優「まあ、今までが今までだから……んじゃ、せーので」

レイ「いや、これで久遠に<sup>ゲスト</sup>大当たりが出たら洒落にならん。ここは雨季さんに食べていただく」

優「お前にとって」「雨季」様って何なんだ？」

レイ「何って……」

優・雨季以外「……」「……」変態でしょ？」「……」

優「……えー、この後の展開は分かると思うのでこの辺りで……」

ふあやて「えーっとしゃい」……」

全員「……」「……」この放送は「魔法少女リリカル……なんか！」「と  
は一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャだったりキヤ  
ラ崩壊していても一切クレームは受け付けません！！」「……」

優「なによは、どっやって元気つけよう……」

## 第八回「渡る世間は ばかり」（後書き）

優君から皆さんに質問があるようです。

優「えっと、なによはを元気づけるにはどうすればいいでしょうか？」

皆さんの書き込み次第でそれをやるかもしれません！（あくまで「かも」）

あと、活動報告もたまに書き込んでるので目を通していただければ幸いです。

今まで感想やメッセを書かなかった方でも大歓迎です。

面白くするためにもあなた方の性癖を晒しましょう（笑）

第九回「お前の耳元で愛を叫ぶ！」（前書き）

すみません、投稿が遅れました……

理由としては友人とカラオケ行っていたので！（おい

今回、軽く（？）キャラが壊れている部分がありますが仕様です！



ヘイト「その生意気な顔が嫌いです　　h a t e だけに」

ふあやて「なによはちゃん、にゃにかいい事あったのかなあ？」

優「とりあえずゲスト紹介をしようか？」

なによは「ふにゃ〜……」

優「……なによは？」

ヘイト「放っておいていいでしょ」

ふあやて「始まる前からこうなんでしゅ」

優「……あれか？」

ふあやて「思い当たることがあるんでしゅか？」

優「いや……でも……」

ヘイト「優柔不断は嫌いです　　h a t e だけに」

優「その割には相変わらず人の膝の上に乗るのな……」

ヘイト「あなたの嫌いな顔を見ないで済みますから」

優「あ、そう。そんじゃ今回のゲストは「白井健斗」様の作品、  
「スーパードットクエスト」から……」

??「初めまして……だな。一回、優の話にでも出てきたが『スーパー・クエスト』の真の主人公、宇野一樹だ。あらすじも糞も話す内容じゃないから、一言だけ自己紹介をさせてもらう。リア充は爆死しろ」

優「そう言うわけで気をつけてください」

一樹「お前が言うな」

優「何でだよ……つと、まだいるんだっけ？」

一樹「ああ」

??「初めまして。『スーパー・クエスト』を書いている白井健斗と申します。白井でも、健斗でも、変態でも、お好きなようにお呼びください。あと手のビデオカメラは触れないでくださいね」

優「いやいや……変態って……」

ヘイト「そのビデオカメラはなんですか？ 変態」

ふあやて「な、なんかこっちに回してましえんか？ 変態しゃん…

…」

なによは「目が怖いです。変態さん」

優「よりによってそれが選ばれるの!？」

変態「美少女に言われるのなら大歓迎さ!」

ふあやて「えと……優しゅんは駄目なんでしゅか？」

変態「野郎でリア充なんて殺したくなりますね！」

ヘイト「女の子っぽい恰好をしたらどうなるんでしょう？」

優「やらんぞ!？」

一樹「面白そうだから却下だ。と言つより現在進行形でリア充で殺したくて仕方ない……百合ならば妥協しよう」

優「デッドオアライブ!? って……うわあああああああ! ! !」

【数分後……】

優「う、うう……」

変態「さあ！ 私の名前を呼んで「らん! !」

優「こんの……変態っ! !」

変態「素晴らしい! !」

優「変態! 悶えるな! 気持ち悪い! 寄るな!」

変態「ああ! !」

ヘイト「……ありですね」

ふあやて「／／／／／」

なによは「ちよつと言つて欲しいかも……」

一樹「完全に女だな」

優「うがあああああ！！ 最初のコーナー行くぞ！！」

変態「リリカルなんとか裏話」

一樹「本編の「魔法少女リリカル……なんとか」で使われたシーンをネタバージョンに置き換えたものだと思えばいい」

優「そうだけどさ……まあいいや。今回はここ！」

兄さんの服が黒ばつかりという事でキャロの見立てで明るい系の服を着た兄さんはすごく新鮮で綺麗だった。

「ん〜、なんか違和感あるな……つか、私服なんてほとんど着崩してるからきつちり着込むとか息苦しい……」

「すつごく綺麗だよ！ 兄さん！」

思わず握り拳を作って力説したけど兄さんは苦笑しながら試着室に戻ろうとした。

『は〜い、こちらスターズ3。優にい……あ、間違えました！』

「いや、間違つてはいない……似合わないだろうけど一応、優にいだ」

『え？　へ！？　嘘！？　本当に！？』  
『ちよつとスバル、何してんのよ？』

スバルさんがものすごく驚くのを通信の向こうでティアナさんが迷惑そうに覗きこむと……

『／／／／／』

「？　ティア？　どうした？」

『な、何でもないわよ！　第一その格好は何！？』

「キャラが身立ってくれたんだけどどうもな……とりあえず服を返してくるから一旦切るぞ？」

『ま、待って！　その服っていくら？』

「えーっと、全部合わせて10980ですね」

キャラが思い出しながら言うと、ティアナさんは財布を確認して、

『後で払うから立て替えといて！』

「は？」

「あ！　それじゃあ、優さん。この服も私がお金を出すのできてく  
ださい」

そう言つてキャラが出したのはセーラー服だった。

「何でそんなのがあるの！？　明らかに普通置いてあるものじゃないよね！？」

「兄さん！　それならこれを！」

「スク水！？　エリオ！　お前の将来が心配だよ！？　と言つより  
そんなもの着ない！」

結局兄さんの着ないの一点張りでティアナさんの頼んだ服以外を買

う事はなかった。

兄さんの為にあるようなものなのに……もったいない。

一樹「センスに脱帽……」

兄さんの服が黒ばつかりという事でキャロの見立てで明るい系の服を着た兄さんはすごく新鮮で綺麗だった。

「ん、なんか違和感あるな……つか、私服なんてほとんど着崩してるからきつちり着込むとか息苦しい……」

「すっごく綺麗だよ！ 兄さん！」

思わず握り拳を作って力説したけど兄さんは苦笑しながら試着室に戻ろうとした。

「は、いい、こちらスターズ。優にい……あ、間違えました！」

「いや、間違ってはいない……似合わないだろうけど一応、優にいだ」

「え？ へ！？ 嘘！？ 本当に！？」

「ちよつとスバル、何してんのよ？」

スバルさんがものすごく驚くのを通信の向こうでティアナさんが迷惑そうに覗きこむと……

「／／／／／」

「？ ティア？ どうした？」

『な、何でもないわよ！ 第一その格好は何！？』

「キャラロが身立ててくれたんだけどどうもな……とりあえず服を返してくるから一旦切るぞ？」

『ま、待って！ その服っていくら？』

「えーっと、全部合わせて10980ですね」

キャラロが思い出しながら言うと、ティアナさんは財布を確認して、

『後で払うから立て替えといて！』

「は？」

「あ！ それじゃあ、優さん。この服も私がお金を出すのできてく  
ださい」

そう言ってキャラロが出したのは初音 クの衣装だった。

「……（フリーズ）」

「じゃ、僕はこれで！」

僕は兄さんに似合うであろう服を持つてきた。

えーっと確かシェ ルさんのステージ衣装だっけ？

露出度的にも嬉しいからありだよね！

「却下に決まってるだろうがああー！」

「『『『ええ！？』』』」

「もうアウトだ！ 色々アウトだ！ まず第一にそれは女物！ そ  
して著作権とかかなりいっぱいはいだから！」

「『『『大丈夫だよ（です）！！』』』」

「どこがだああー！！！」

変態「はあはあ、優たん。次のコーナーいこうか？」

優「ひっ！？ よ、寄るな！ きしよい！ あっちいけー！」

変態「はっはっはっ、怖がらなくて大丈夫さ……さあ、お兄さんと  
たのs「それ以上したら 斬ります」へ、ヘイトたん。落ちt  
「スパツ」ぎゃああああー！ー！ー！ いー！ー！たー！ー！いー！  
ー！ー！」

ヘイト「はっ！？ あ、あまりに気持ち悪くて思わず……あなたの  
ことが大嫌いです！ hateだけに！」

ふあやて「えと、えとえと……本音ぶつちやけコーナーでしゅ！」

一樹「最初は「鞘」さんから質問……「優さんは実質SSSランク  
らしいけど、フェイトさんとアリシアさんには勝てないんですか？  
答えるのが遅かったからな、ラバーズってことでいいのか？」

優「あれは魔導師ランクで比べられる存在じゃない……」

一樹「……男の状態だったらリア充っぷりに殺してたな……」

優「嬉しいけど嬉しくない……」

変態「次の質問！ 「理不尽な暴力」さんから……「優が一時的に  
でも性転換した場合、被害はどの位ですか？ 被害総額、負傷者  
数、崩壊した建造物など予想で構いませんので、お教えください」  
だとき。現在進行形では究極的な男の娘状態だからな……これで本  
物のおんにゃのこになったら……じゅるり」

優「寄るな！ 見るな！ 想像するな！！」

一樹「で？ どんなもんだ？」

優「元々の原因のくせに……覚えとけよ！ 絶対泣かしてやるからな！！」

変態『一樹……優を女装させる以外に何かしたのか？』

一樹『精神年齢をいじって幼くさせてみたが……迷惑だったか？』

変態『よくやった！ グツジョブだ！』

優「無視するなー！ こらー！」

ふあやて「な、なんか可愛いでしゅ」

ヘイト「これで体も小さければ膝の上に乗せて屈辱を味あわせてあげたのに……」

なによは「……いい！」

一樹「さて……最期のコーナーのお時間だが？」

優「最期って……誤字とも言いにくい言葉を……というより今回はこれと言って使えそうなものがないんだよな……」

なによは「あ、「七つ夜&夜つ七」さんのところのラストさんから良いものを貰ったからそれを使えば……」

優「ん？ クッキーか？ どれもつまそうだけど……」

なによは「一つが当たりで残りは翠屋のクッキーなの！」

一樹「なによはは翠屋と接点があったのか……」

なによは「ううん、スタッフさんに買ってもらった」

優「悲しい事実だなあ！？ って、そう言えば当たりは？」

なによは「魔理亜さんのクッキー」

優「……攻撃力は？」

なによは「ラストさん曰く……昔、魔理亜さんのおにぎりを食べた人は全身の骨『だけ』溶けて昇天したらしいの……物理的に」

優「怖っ！！」

一樹「じゃ、とりあえず俺の眼力で翠屋のクッキーを貰うか……」

優「ちょ！？ そんなのあり！？ 俺にも教えてよ！！」

一樹「リア充に教えるわけがないだろう！！」

優「酷い！！」

なによは「大丈夫なの！ これを使えば！！」

ヘイト「嘘発見機（未来のネコ型ロボット風に）」

なによは「にゃ!?!」

ふあやて「えと……これを使えば嘘をついているかどうか分かりましゅ」

なによは「うう……でも負けない! 一樹さん! 当たりのクッキ  
ーはこれですか!?!」

一樹「しらん」

「ぶーー!」

なによは「……」

ヘイト「……」

ふあやて「……」

優「……」

ヘイト「役立たず」

なによは「うっ!」

ふあやて「うう……食べたらずんじゃうのかもしれないの?」

変態「私がふあやてちゃんの食べる分を食べてあげよう! もしも  
無事だったらデートしていただければ!」

ふあやて「ふ、ふえ！？　だ、駄目で「いいですよ？」　ふえええええ！？」

変態「それでは早速……」

優「その前にふあやて、俺の分を貰ってくれ」

ヘイト「っ！　それでは私のも」

なによは「？　じゃあ私のも……」

ふあやて「ふえ！？　ふえ！？」

優「それではその変態さん……とつとふあやての分を食いやがれ」

変態「……（フリーズ）」

ふあやて「あ！」

なによは「あ？」

ヘイト「なによははおバカさんだからまだ分からないのですか？」

なによは「ば、バカじゃないもん！！」

優「まあ、要するに……残ってるのは変態さんのとふあやてのクッキー……ふあやての分を食べるって言ってしまった変態さんの分しか残らず、そして無事で済まないからデートも無しってことだ」



第九回「お前の耳元で愛を叫ぶ！」（後書き）

さあ、この回も無事（？）（終えましたが、正直ゲストさんがもういません！（え？）

我こそはと思う人はメッセを！二回目の人でも構いませんが一回目の人優先でやらせていただきます。

いや、マジでお願いします……はい。

## 第十回「オルタ化」(前書き)

さあ、二回目キャラの登場です。

ちなみに一度紹介したキャラは紹介を省略しますので悪しからず…  
…

## 第十回「オルタ化」

優「さて……このラジオも遂に十回目を迎えたわけなんだけど……」

ふあやて「すごいでしゅね！」

なには「私の人気のおかげなの！」

ヘイト「人気投票ゼロのくせに生意気です」

なには「orz」

優「ヘイト、そう言う事言わない。んで、折角の十回目何だからなにかやりたいよね？」

ふあやて「例えばなんでしゅか？」

優「いや、言ってみただけ。それじゃいつも通りゲストを呼ぼうか」

ふあやて「ふえ！？」

なには「今までの振りは一体……」

優「じゃあいいよ、俺がボケに回ったってことで」

ヘイト「適當すぎて嫌いです     hateだけに」

優「ラジオ番組じゃ中の人のはっちゃけるなんてよくあるだろ？  
大体これは本編に関係ない」

なによは「ものすごく忘れ去られてそんな事実を改めて言ったの…」

ふあやて「と言つより中の人って誰なんでしゅか？」

優「？俺は誰の声でもできるって言つてなかったっけ？」

なによは「そんなの言つてたっけ？」

ヘイト「初耳です」

ふあやて「ふえ〜……しゅ〜い……」

優「んっ、んん！」

なによは「この通り……」

ヘイト「誰の声でも……」

ふあやて「こなせるんだよ」

ふあやて「ふえ！？私の声でしゅ！？」

なによは「ふあやてちゃんの声でも噛まなかつたら違和感あるの」

ふあやて「そうでしゅね！しゅみましえんでした！」

ヘイト「これなら分かりませんね」

ふあやて「ふええええ！ あしよばないでええええ！」

優「んじゃ、そろそろゲスト紹介に戻るぞ」

ヘイト「いきなり素の声に戻るの嫌いです hateだけに」

ふあやて「今回は二回目の登場になりましたけど」

なには「秋代さんの作品「転生者はシャーマン」からのゲストなの！」

葉生「えっと俺は前に紹介したからとりあえず俺の持霊を……」

アルトリア『アルトリア・ペンドラゴン

麻倉葉生に仕えし、持霊です。

生前はアーサー・ペンドラゴンとして名を馳せてました。』

クー・フリーン『クー・フリーン

麻倉葉生に仕える持霊だ。

生前は赤枝の騎士として

戦場を駆け抜けた英雄さ』

ギルガメッシュ『ギルガメッシュだ

麻倉葉生と言う雑種の持霊だ。

生前は唯我独尊的な王だの、

高慢な王だの、圧制をひく王だの

慢心王だの言われてるが一つ言っておく……

慢心せずして何が王か！……！』

なによは「な、なんかギルガメツシユさんが怖いの……」

ヘイト「怖いと言うより偉そうで嫌いです hateだけに」

ふあやて「ふええええ！ ごめんなしゃい、ごめんなしゃい、ごめんなしゃい！」

優「ちなみにこのラジオではふあやてを虐めたらチート能力者から制裁が飛んでくるから」

ギルガメツシユ『ふん！ よかろう……我に齒向かう事を許す！』

優「死んだな」

葉生「お願いだから殺すのだけはやめて……こつちの話に影響出るから……」

優「本当にギリギリ死なないぐらいで殺られそうだな……ギリガメツシユだけに」

葉生「それ俺の方のネタ……」

アルトリア『そろそろ進めなくていいのですか？』

クー・フリーン『まあ、こつちう緩い空気も悪くはねえけどな』

なによは「でもこのままだとリスナーさんがいなくなっちゃうの」

ギルガメツシユ『よかろう、最初のコーナーを始めることを許す！』

優「そのノリで言いたかっただけだろ……」

葉生「えっと最初は……リリカルなんとか裏話」

アルトリア『このコーナーでは本編で使用された話を基にして……』

クー・フリーン『作者が執筆中にふと思いついたことやネタを晒すコーナーだ』

ギルガメツシュ『ふん！ 雑種ごときが我を楽しませることが出来るかどうか甚だ疑問ではあるがな！』

優「今回はこのシーンだ」

「私は？ 番のレリックが必要だから……」

「ふん、どうして？」

「……」

言わないか、言えないのか……

「それじゃ、レリックを見せてもらっていいかな？ こっちは？ 番  
じゃなくても集めなくちゃいけないから」

ルルーちゃんは少し悩むと、小さく頷いた。

「そっか、ありがとう」

「って！ いいわけあるかああ……！！」

いきなりヴィータが上から突っ込んできた（二つの意味で）

「大体、優！ そんなに余裕あるならそいつら捕縛しろよ！？」

「いや……平和に話し合いで何とかなりそうだったし……あ、レリック開けるよ？」

ルールーちゃんが頷くと、アギトもガリユーも特に何も言わずに黙っていたので開けてみることにした。  
そこに書かれていたのは？ 番のレリック。

「ん、？ 番みたいだね。だからこれは素直に渡してくれないかな？」

「うん、分かった」

「つて！ 駄目ですよ！？ ルーお嬢様！！」

今度は水色の髪をした女の人が地面から突っ込んできた……流行ってるのか？

「私が欲しいのは？ 番……」

「んで、これは？ 番だし……」

「ドクターの意思に従う必要はねえ！」

「……」

……孤立無援だな。

「とにかく！ 私達は？ 番以外も必要なんです！ ドクターも言っていたでしょう！？」

「……ああ、うっかり」

「そうか、うっかりなら仕方ないな」

「そうだな、仕方ねえ」

「……」

うっかりは誰にでもあるしな、そういうこともあるぞ。

「あー！ もう！ とにかくレリックはいただきますー！！」

そう言うと騒がしい女の人は俺の持っているレリックめがけて飛びかかり、地面の中に潜った……俺ごと。

「な！？なんでフィールドとかバリアとか張ってないんですか！？」

「いや、アギトもルールーちゃんもガリユーも攻撃してこなかったし話し合いのつもりだったから……」

「一旦地上に戻りますから今度はちゃんと展開してください！」

「あ、すみません」

なんで俺は敵に怒られているんだろう……

地上に戻ってきた俺らにフォワード陣やヴィータ達は何とも言えない顔をしていたが俺を抱えている女の人の突っ込んだら殺す的な雰囲気にも言えずにいた。

つか……その殺気が隣にあるってマジで怖い。

「セイン……何で戻ってきたの？」

「そこで突っ込んだじゃうんだ！？」

ルールーちゃんは何を言っているのか理解できなかつたらしく、しばらく考え込むと、

「……ああ、うっかり」

「もうそれはいいですから！」

セインと呼ばれた女の人は軽く涙目になりながら突っ込んだ。

「うつかりなら仕方ねえじゃねえか」

「……」

「なんか、白けたな……」

ヴィータの一言に完全に崩れるセイン。

なんか……哀れだ。

うん、きつとこの子はもう少し真面目にやりたいいい子なんだ。

俺としては戦わないで済めば多少変な感じでも許容できるけどこの子は頑張り屋さんなんだ……

「とりあえず、セインちゃん。もう一回……もう一回だけ最初から仕切り直そう？　ね？」

「う、うう……ありがとう、本当にありがとう……」

「うん、うん。君は頑張り屋さんだから真面目にやりたかったんだよね？　ごめんね？」

「うわあああああん……」

セインが泣き止むまでとりあえず抱きしめてあげることにした。

「うん、正直俺もこういう立場になったことあるから……てかほとんどそうだったからどれだけ辛いのかは分かるよ……本当にごめんな？」

「うう……兄貴って呼ばせてくれ……」

「ああ、好きに呼べ！」

こうして他者から見たら突っ込みどころ満載かもしれないが俺とセインとしては自分が間違っているかのような空気の辛さを知っている者同士としては結構真面目な状況だったのだ。

葉生「うっかり……」

「私は？番のレリックが必要だから……」

「ふうん、どうして？」

「……」

言わないか、言えないのか……

「それじゃ、レリックを見せてもらっていいかな？ こっちは？番  
じゃなくても集めなくちゃいけないから」

ルルーちゃんは少し悩むと、小さく頷いた。

「そっか、ありがとう」

「って！ いいわけあるかああ！！！！」

いきなりヴィータが上から突っ込んできた（二つの意味で）

「大体、優！ そんなに余裕あるならそいつら捕縛しろよ！？」

「いや……平和に話し合いで何とかかなりそうだったし……あ、レリ  
ック開けるよ？」

ルルーちゃんが頷くと、アギトもガリユも特に何も言わずに黙  
っていたので開けてみることにした。

そこに書かれていたのは？番のレリック。

「ん、？番みたいだね。だからこれは素直に渡してくれないかな？」  
「うん、分かった」

「つて！ 駄目ですよ！？ ルーお嬢様！！」

今度は水色の髪をした女の人が地面から突っ込んできた……流行つてるのか？

「……ああ、うっかり」

「ああ、うっかりしてたぜ」

「……うっかり」

「「「「ガリユーってしゃべれたの！？」」「」「」」

「……ああ、うっかり」

ルールーちゃんが誤魔化すように言っけど正直衝撃的すぎて俺達は全員フリーズしていた。

葉生「確かにこれは衝撃的だね……」

優「でも何故かルールーちゃんが言っけと本当にただのうっかりみたいに聞こえるからすごい……」

クー・フリーン「あのルーテシア嬢にやけにはまってるからなあ……」

……」

アルトリア「次は質問コーナーですね……ええっと本音ぶっちゃけコーナー？」

優「まあ、大体分かればコーナー名なんてどうでもいいんじゃない？」

クー・フリーン「ま、そうだな。んじゃ、俺からいくぜ？」「貴方のテレビに」からの質問だ、「シヤマルの料理下手は直らないの？」……たしかに最後のコーナーで壊滅的な能力を見せつけてくれるからな……」

優「つつても最近のって贈り物の方がヤバくない？」

全員「……………」

アルトリア「次の質問にいきましょう。「胃痛持ち」さんからの質問。「優は朝はお米とパン、どっちがいいですか？」ちなみに私はおいしければどちらでもいけます！」

葉生「いや、聞いてないから……」

優「割と普通の質問だな……ん、最近手軽に摂取できる10秒飯とか、カリーメイトとか……ご馳走な時はコーフレークとかかな？」

全員「……………」

優「？ どうした？」

葉生「ご飯、ちゃんと食べてないの？」

優「ちゃんと食べてるだろ？ 昼食は大体フォワードやマテリアル、隊長陣と食べるから食堂で食べるし、夜は……その時によって変わ

るな。まあ、食堂が空いてなかったらユイが結構作ってくれるから助かるよ」

ユイ「作らなかつたら優は夕飯を抜くでしょう……」

優「まあ、明日の朝その分食べればいいかな……って」

ユイ「絶対に許しませんよ！　優が私のマスターである限り体調は常に万全にして貰います！」

なによは「なんかマスターって言うより旦那さんに尽くしているみたいなの……」

ユイ「っ！？　わ、私はこれで／／／／／」

優「あ！　おい！　ユイ……！」

ヘイト「私より速く動けるなんて生意気……」

優「何だったんだ？　今の……？」

クー・フリーン『あ……ここまで鈍感だとむしろ気持ちいいな』

ギルガメッシュ『ふん！　雑種の思考など理解できなくて当然！』

アルトリア『あそこまでされて気が付かないのはある意味才能ですね……』

葉生「（よし、ラバーズの気持ちにはまだちゃんと気が付いていない……チャンスはまだある！）」

ヘイト「鈍感過ぎて嫌いです　　h a t e だけに」

ふあやて「ユイちゃん……かわいいしょうでしゅ」

優「え？　一方的に俺が責められるの？」

なには「よく分からないけど悪いんだよ！」

優「よく分からないのに悪いって断言してんじゃないやねえ！！」

葉生「それじゃあ、最後のコーナーなんだけど……やってみたいやつがあるんだけどいいかな？」

優「？　どんなのだ？」

葉生「サイコロを振ってその出たやつを振った人が従うって奴」

優「ん〜、確かにずっとあの料理コーナーも正直そろそろ死人が出るんじゃないかって不安だったからな……いいんじゃないの？」

ふあやて「いいとおもいましゅ！」

ヘイト「ゲストなのに意見するなんて生意気で嫌いです　　h a t e だけに」

優「ヘイト？　あんま失礼なことばっか言ってるともう絶対に膝に乗せないからな？」

ヘイト「まあ、たまにはいいんじゃないでしょうか？」

なには「いきなり意見を変えたん」「ザンバりますよ?」「ごめんなさーい!」

優「んじゃ、全員で振るか?」

アルトリア『幽霊なので振れません』

クー・フリーン『幽霊だから触れねえぞ』

ギルガメッシュ『我が振られるはずないだろう』

葉生「サイコロが大きくなって振れない」

なには「重たいの」

ヘイト「重すぎて嫌いです hateだけに」

ふあやて「お、おもいでしゅ」

優「は? 全員振れないのにこれを企画したの?」

葉生「あゝ、そっかあゝ、考えてなかったよ。あ、でも優なら振れるんじゃない?」

優「ん? いけると思っけど……何があるんだ?」

- ・最近の近況報告はつまらないので性転換を
- ・趣味の話はつまらないので性転換を
- ・普通の写真撮影会はつまらないので性転換して写真撮影会
- ・ネタが無いので性転換
- ・もう性転換しちやいなよ（笑）

優「……さて、ここに「なっぺ」様から頂いた某世界的魔法使いハリウッド映画、【○○○〇ツ〇】の「真実薬」がある……まあ、要するに自白剤だ。今素直に誰がこんな企画したか話せば百二十八分の百二十七殺しで済ましてあげよう」

クー・フリーン「ほとんど死んでるじゃねえか!？」

優「で？ 誰かな？」

葉生「アル！ お願い!」

アルトリア「はっ！ ギルガメツシュ。頼みますよ?」

ギルガメツシュ「後は任せたぞ？ 狗」

クー・フリーン「俺かよ!？」

葉生「優、これを提案したのは……」

アルトリア「実は我々ではなく、」

ギルガメツシュ「その狗が一人で考えたことだ」

クー・フリーン』な！？ てめえらー!!』

優「そっかぁ……二つ選ばせてあげる……一つはさっきの百二十八分の百二十七」

クー・フリーン』……もう一つは?』

優「死ぬまでホットドッグを食べ続けろ』ホットドッグは止めてください!』あ、ダブルがお望みですか?」

クー・フリーン《こいつってこんなに黒かったっけ!?!》

アルトリア《余程、嫌な思い出があったのでしょうか……もはやあれは優・オルタ!》

ギルガメッシュ《ふん! あの男も堕ちたものだ》

葉生《とりあえず、優を元に戻すまで帰ってこないでね?》

クー・フリーン』ちよ!?! 待てよお前ら!?!』

優「さぁ……あつちで O H A N A S H I しよつか?」

クー・フリーン』やめろおおおおお……!!』

葉生「さて、たぶんもう帰ってこないから締めをやるのか？」

ふあやて「ふ、ふええええ！？ いいんでしゅか!？」

アルトリア『彼は私達のための犠牲になったのです……彼の死を悲しまずに前を向いて生きましょう!』

なによは「なんかもう死んだ扱いな……」

ギルガメツシュ『あの男も墮ちなければ骨のある奴であつただろうに……』

ヘイト「だから延ばすのは嫌いです hateだけに」

葉生「それじゃ」

全員「……この放送は「魔法少女リリカル……なんとか!」とは一切関係ありません! ストーリーがグチャグチャだったりキラ崩壊していても一切クレームは受け付けません!」「」「」「」

## 第十回「オルタ化」(後書き)

第十回目を終え(無事とは言わない)、あとどれくらい続くんだろ  
う……少なくとも番外編を挟んだ時はラジオをやるつもりはないん  
ですけどね!

第十一回「主人公なんて飾りです！ 偉い人にはry」（前書き）

もう今回は主人公の扱いが酷いです。

と言っよりいつものごとく駄作ですが楽しんでいただければ幸いです。

第十一回「主人公なんて飾りです！ 偉い人にはry」

優「はあ……リリカルラジオが始まります……」

ふあやて「あ、あの。なんでしょんなに暗いんでしゅか？」

なによは「なんか「なんで2が」とか「3が欲しい」とか言ってたの」

ヘイト「意味が分からなくて嫌いです hateだけに」

優「……ちよつと作者とO H A N A S H Iしてくる……」

ふあやて「ふえ！？ だ、だめでしゅよ！ もう本番中なんでしゅから……！」

ヘイト「そうです、私の座る所がなくなるじゃないですか？」

なによは「無理に膝に座らなくてもいいと思うn「ザンバりますよ？」「ごめんなさーい……！」

優「はあ……作者が酷いよなあ……とりあえずラジオを終わらせてから3にしてくれって頼んでみるか……」

ふあやて「しゃっきから2とか3ってなんなんでしゅか？」

優「なんかフラグを立てるだとか、そういうのらしい」

なによは「（私にもチャンスがある！？）」

ヘイト「（誰にもこの場所（優の膝）は渡しません!）」

ふあやて「（ふえええええ!?!）」

優「とりあえず紹介にいかがか……今回は「まーた」様の作品、「魔法少女リリカルなのは」Introduction chapter of story」からのゲストです」

???「どうも、こちらの作品で出ているメアリスティングという者だ。メアリスティングとは長いからメアで構わない。私の最近はまだ持っているものは翠屋の料理を食べる事で、毎日食べなければ、禁断症状が出る程に中毒者になった。まあ、よろしく頼む」

優「俺のアイス中毒症の翠屋の料理バージョンか……」

メア「ふむ……時に食べるのはいつのが一番おいしいと思うかね？」

優「食後や風呂上がりもちろんうまいが一番は三時のおやつだろう」

メア「お前とは語り合えそうだ（がしっ）」

優「ああ！（がしっ）」

???「……自分の紹介入っていいですか？」

優「ああ、すみません」

???「最近、夏休みだというのに凄く忙しいけど、一応頑張って



「……えつと……俺の紹介していい？」

メア「今、私は機嫌が悪いんだ。そんな些細な事でラジオの進行を阻むな」

「……あ、すみません。ホントに、はい……えつと作者、俺の紹介を」

また「うるさい。可愛らしいふあやてちゃんを見るので忙しいの！ 邪魔しないで！」

「……ぐす」

優「わー！？ ラクト！ 紹介お願いしていいかな！？ この後のコーナーの関係もあるから是非、紹介して欲しいんだ！」

「……うん……最近？の扱いが酷くて、少し落ち込んでいるこっちの作品で主人公を演じているラクトという者です。今日だって、ラジオが始まる前に作者に嫌がらせを受けましたし……」

優「って、「また」様！？ 何やってるんですか！？ 主人公を  
ラクト  
虐めないであげてください！！」

また「楽しいと、ついやっちゃうんだ（笑）」

優「駄目だから！ 色んな意味で駄目だから！！ とりあえず小説紹介をお願いします！」

また「はい！ ラクトは4年前（5歳）の時になのはと遊んだ時の記憶が夢に出て、そして、その夢が始まりを告げるように、魔法

関係の事に巻き込まれる主人公最強系のお話です。  
こちらの作品はまだ始めたばかりで現在無印です。よろしければ一  
覧になってください。それと、伏線がヤバイです」

ラクト「えっと……それじゃあ最初のコーナーに」

メア「(ギロツ)」

ラクト「すみません、ホントすみません……」

優「メアさんも何で止めるの!? 流れ的にもういって良かったよ  
!?!」

メア「なに、こいつが進行係というのには不服があったただけだ」

また「右に同じ!」

優「マジで酷いな!? とりあえず最初のコーナー!」

また「リリカルな何とか裏話」

ラクト「このコーナーは……」

メア「このコーナーは本編のシーンを少々改変して起こりえたIF  
ストーリーのようなものだ」

ラクト「今回」

なによは「今回のシーンはこのなの!」

聖王医療院で意識不明だった女の子の検査結果を聞き終え、俺は病室から歩きながらフェイトに念話で報告する。

「検査の方は一通り終了……大きな問題はなさそうだからこれからそっちに戻る……んだけどグイータ怒ってるか？」

『うくん、O H A N A S H I したがつってるかな？』

「超、帰りたくないです！」

『残念だけどそれは無理だよ？ 私達は優を一日自由に使える権利を持っているんだから』

「……は？」

ちよつと待てや、そんな話聞いてねえーぞ？

『はやてがちゃんとして仕事した人にその権利をくれたの』

「よおーし、帰るよ。帰ってはやてと少し O H A N A S H I するよ」

もうはやてと O H A N A S H I したくてしたくて堪らない……どうしてやるうかなんてことを考えながら入口付近にあった売店でこれから来るであろう大量の報告書を想像しながらそれに太刀打ちできるように軽食を買っておく。

「……ついでにこれも買っておくか」

俺は一番手前にあつたうさぎの人形を手にとって会計を済ませると、一旦病室に戻り、女の子の所に置いてくる。

女の子はうわ言のように「ママ」と繰り返していたけど……

「俺に何とかできる問題でもないしな……この子の後見人を探すぐらいは尽力してあげるか……」

うなされる女の子が少しでもマシになるように俺は女の子の頭を撫でてから六課に戻ることにした。

ラクト「ついだ」

ヘイト「ついでに……」

聖王医療院で意識不明だった女の子の検査結果を聞き終え、俺は病室から歩きながらフェイトに念話で報告する。

「検査の方は一通り終了……大きな問題はなさそうだからこれからそっちに戻る……んだけどヴィータ怒ってるか？」

『うん、O H A N A S H I したがつってるかな？』

「超、帰りたくないです！」

『残念だけどそれは無理だよ？ 私達は優を一日自由に使える権利を持っているんだから』

「……は？」

ちよっと待てや、そんな話聞いてねえぞ？

『はやてがちゃんと仕事した人にその権利をくれたの』

「よーし、帰るよ。帰ってはやてと少し O H A N A S H I するぞ」

もうはやてと O H A N A S H I したくてしたくて堪らない…  
…どうしてやるうかなんてことを考えながら入口付近にあった売店  
でこれから来るであろう大量の報告書を想像しながらそれに太刀打  
ちできるように軽食を買っておく。

「っと、ついでにこれも買っておくか」

俺はピンク色の……

「何だ……これ？」

カエル……なのか？ でもうさぎみたいに耳が長いし……ピンクの  
カエルは（多分）いないし……あ、でも顔の辺りがカエルっぽい。  
あまりにもよく分からないピンクの生き物（だよな？）の名前を見  
てみようと思札の所に書いてある名前を読んでみると……

【ウサル】

「ウ エル！？ まさかのうさぎとカエルの複合体！？ いや……  
さすがにこれはないな……他に」  
《それを捨てるなんてとんでもない》  
「捨てられない！？ 呪いのアイテムじゃねえの！？ てかこれっ  
て押し売りだよね！？」

思わず先ほど見た値札を再び見ると……

【ウサエ マジで買ってください。無料ですのぞ】

「サエル人気ねえな！？」

仕方なくピンクのうさぎとカエルの複合生命体を貰い、六課に戻るうかと思っただがそもそもあの女の子に何かプレゼントしようと思っただのもあったことを思い出し……

「目が覚めた時のネタってことでいいか……」

と、半ば脱力気味に女の子の病室に置いてきた。

ちなみに、何故だか知らないが女の子の部屋に置いていく時は謎の呪いは発生しなかった……

ラクト「……」

ふあやて「これは色々すごいでしゅね……ってあれ？ ラクトしゃん？」

優「お前ら……地味に酷いな……」

全員（除：優、ラクト）「……」

優「とりあえず次のコーナー、本音ぶつちやけコーナーだ」

メア「では、私からいこう。「いつも貴方の真後ろに」さんからだ。「優君性欲は持て余してるのかな？」だそうだが……本当に男なのか？」

優「酷い質問に酷い突っ込みですね！？ そりゃ人並みにはありませんよ！？ それに俺は男です！」

まーた「でもそれにしてはラバーズに対して……」

優「あそこまで迫られたら普通は引きます！ 次！！」

まーた「んじゃ、」ヨシダ「さんからの質問……」ラバーズに襲われるのとラバーズを襲うの。どっちがいい？」だつてさ！」

優「あんたら選んでるんじゃないだろうな！？ なんでそついう質問を引き当てるの！？」

メア「いいから答えろ」

優「襲われるのは想像できても襲ったとしてもそのまま襲われ返されそつな気がするので何とも言えません」

まーた「……そつだな」

メア「愚問だつたか」

ラクト「優……頑張れ」

優「ラクト……本当にありがとう……それじゃ！ 最後のコーナー！！」

ラクト「ああ、最期のコーナーね」

ヘイト「このコーナーで何故か死者は出ていないのでその言葉は誤りです」

ラクト「いや、でも」

ヘイト・メア「」（ギロツ）「」

ラクト「マジでごめんなさい」

優「今回は「七つ夜&夜つ七」様の刹那から料理本を貰ったからそれを参考に作ってみた……まあ、初めてだからラクトほどおいしくないと思うけど……」

メア「ラクトの唯一の存在意義だから……勝てるのは翠屋の料理ぐらいだ」

ラクト「俺の存在意義って……orz」

まーた「んで？ 今回の当たりは？」

優「それも俺が作った。色々なレシピがあったから……割と命懸けだった」

ふぁやて「何があっただんでしゅか!？」

優「料理を作っている途中で何度も意識を失いそうになった……だから味見はしていない……悪いな」

なによは「それを食べていたらこのラジオに出てこれなかったと思うの……」

ヘイト「そしてお約束のように見た目だけは全ておいしそうで嫌いです hateだけに」

メア「見事なものだな」

まーた「よし、まずはラクトが試食してみてくれ」

ラクト「何で俺が!？」

メア「それがお前の唯一の存在意義だからだ」

優「ラクトの存在意義がだんだん酷いものに……」

まーた「とりあえず素直に食べれば出番が増えるかもしれないぞ?」

ラクト「っ! 全て試食させていただきます!」

優「いや……さすがに止めておいた方が……」

ラクト「うぐっ!?!？」

ヘイト「いきなり当てたようですね……」

ラクト「出……番の……ためなら……まけん!」

優「……あれ、食べるのか? 今までの奴より結構きついと思うんだけど……」

まーた「メアの料理の腕がシャマル以上だからね……あえてどっちの意味でかは言わない」

メア「ラクトが作れるんだから必要ないだろう」

ふあやて「あ、あの……これ、食べていいでしゅか？」

優「ん？ ああ、いいよ。あんまり期待しないでくれ」

ヘイト「食べてあげます」

なには「手料理を食べられるなんてお嫁さんみたいなの！」

優「そう……か？」

メア「謙遜するな、確かにラクトや翠屋の料理ほどではないがお前  
のも充分うまい」

まーた「一人だけ地獄のような料理と戦っているけどね」

メア「ふむ……今度勝負してみないか？ 審判はラクトだ」

優「ラクト……そのうち死ぬんじゃないのかなあ……まあ、出番の  
為って言ってたしよっぽど出たかったんだろうな」

まーた「まあ、あくまで出す「かも」だから分らないけどね」

優「酷っ!？」

ふあやて「おいしーでしゅ〜」

ヘイト「(もきゅもきゅ)」

なには「あ〜んってしてもらえるととっても嬉しいん」ザンバリ

ますよ？」「ごめんなさい！」

メア「それではそろそろ締めるぞ？」

まーた「十分ラクトも弄れたから満足だ」

優「最悪だな……」

全員（除：ラクト）「この放送は「魔法少女リリカル……  
なんとか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャ  
だったりキャラ崩壊していても一切クレームは受け付けません！  
！」「」「」「」

第十一回「主人公なんて飾りです！ 偉い人にはry」（後書き）

ラクト……頑張れ！

とりあえず、ラジオでも言っていましたけどあなたがふあやて達をコ  
ラボしていただけませんか？

他の人から見てどんな感じに見られているのかがふと気になったの  
で……

第十二回「嫌な予感はあるけど良い予感はあるほど当たらない」(前書き)

帰ってきました！

ええ、本当は昨日だったんですけど体調の関係やキャラの確認に手間取って一日遅れての投稿です。

本編やらないと……

第十二回「嫌な予感はあるけど良い予感はあるほど当たらない」

ティア「リリカルラジオが始まります」

ヘイト「……………」

ふあやて「……………」

優「…………あれ？　なによはは？」

ティア「私は感想板で出して欲しいとの要請がありましたから、人数の都合で一番人気のないあの人が出ないだけです」

優「すげえ！　ティアすげえ！！　第一回しか出てないのにまさかの復活！？　…………あれ？　そっいえばシュバルは？」

ティア「…………世の中、知らなくてもいい事があるんですよ？」

優「意外と重い話だった！？」

ヘイト「人気がなくなったら生きていけません」

ふあやて「ふええ！？　ゆ、優ちゃんと出られなくなるでしゅか！？」

優「ふあやてが出なくなることはない気がするけど……………まあ、とりあえず今回のゲストを呼ぼうか」

ティア「『夢刹』様の作品『モンスターハンター』少し不幸なハンターの日常』からの登場です」

「????」……」

「??」……」

ふあやて「あによ……紹介を……」

??「んー、こっちにいるのはクロウ・レイフォード。無口で無表情だからクールだと思われているけどただ人付き合いが苦手なだけの主人公。心の中では突っ込み役で混乱するとエセ関西弁になる。因みに大なり小なり一日一度はトラブルが起きる」

クロウ「……こっちは夢刹、口数が少なくてマイペース。……」……「……」や「んー」とかの口癖が多くて可愛い物好き。可愛いものがあれば頭を撫でる。……俺ほどじゃないけど不幸」

ティア「なんでわざわざ相手の紹介をしてるんですか……」

優「と言うつより「夢刹」様、いつの間にかふあやてを膝の上に乗せてるし……」

ふあやて「ふええ!?! いつの間に!?!」

ヘイト「気付いてなかったのですか? 鈍すぎて嫌いです  
h  
ateだけに」

優「まあ、膝の上に乗って撫でられているってことは可愛いからだ  
よ」

ふあやて「ゆ、優しさんは可愛いと思いましゅか?」

優「ああ、すごく可愛いよ（マスコットのな意味で）」

ふあやて「／／／／／／」

ヘイト「生意気です……」

ティア「私も凡人じゃなければ……」

優「何故だかわからないけど暗い雰囲気になってきたので最初のコーナー！」

クロウ「リリカルなんとか裏話」

夢剝「んー、このコーナーでは本編で使われたシーンをNGシーンっぽく加工します……だっけ？」

優「まあ……大体そんな感じですよ」

クロウ「今回はここだ」

あまりの眠さに一瞬どうしてこんな所にいるのかわからなかったが、ユイの説明もあってなんとか前に様子を見に来た女の子絡みだったことを思い出した。

と言うより、本来であればのはが来るはずだったんだが昨日の俺の一日専有権で六課の一部を破壊しながらの騒動ではやてとOHANA SHIすることになってしまい、必然的に空いていた隊長である俺が来ることになった。

マジで迷惑だ……このまま専有権も剥奪されちまえばいいのに……  
そんなことを考えながらシグナムとユイと一緒に並びながら歩いて  
行くと、シャツ八さんが駆け寄ってきた。

「申し訳ありません！」

「謝罪は良いから状況を……」

「はい、特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます……今の  
ところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「なるほど……それじゃ、俺が探してきますよ。まだ中にいるみた  
いですし」

「私も手伝います」

「私もだ」

「申し訳ありません……助かります」

とりあえずシャツ八さんとシグナムは中から、俺とユイは外から探  
すことになり、それぞれバラけて探すことになったが……

「広いな……ここ……」

無理ではないけど隠れている子供を探すには骨が折れそうだ……  
ユイはすでに俺と別れて探しているので俺も探そうとは思うがどこ  
から探せばいいのか見当もつかなかった。  
仕方なしにあてもなく彷徨い歩くことで探すことにした俺は、子供  
の隠れられそうな所を中心に見ていくが一向に見つからない。  
そろそろシャツ八さん達とも合流しようと思つくと建物内に続く道を進んで  
いくと近くの草むららがさがさと音をたてて揺れた。

草むらから野生の女の子が飛び出した！

って、違うだろ……

「や、お嬢さん。探してたんだよ？」

「ひっ、い……やつ……」

ん、嫌われてるのかな……まあ、無理に近づかなくてもいいか……俺は女の子から少し離れた位置で立ち止り、話しかけた。

「そのうさぎさん……気に入ってくれた？」

「ふえ？」

「君が寝ている間にプレゼントしてあげただけ……出かける時も一緒ってことは気に入ってくれたのかな？」

「……うん」

「そっか、それは良かった……みんな君のことを心配してるよ？早く戻ろう？」

「でも……ママが……」

そう言えばこの前もつわ言みたいに言ってたな……

シャツハさんが人造魔導師って言ってたけどやっぱり母親みたいな存在は必要なのかな……

「それじゃあさ、僕と一緒に探してあげる」

「ふえ？」

「一人じゃなくて、二人で探そう？二人じゃなくて、三人で。三人じゃなくてみんなで……そうすればきっと見つかるよ」

「うん！」

女の子は笑顔になると俺に駆け寄ってきて足元に抱きついた。俺はゆっくりとそれを外して視線を合わせる。

「君の名前は？」

「ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか……いい名前だね」

「あなたの名前は？」

「暁優」

「暁優……いい名前だね！」

俺達はそんなことで笑顔になりながらシャツ八さん達の所に戻った。

夢刹「……彘？」

あまりの眠さに一瞬どうしてこんな所にいるのか分からなかったが、ユイの説明もあつてなんとか前に様子を見に来た女の子絡みだったことを思い出した。

と言うより、本来であればのはが来るはずだったんだが昨日の俺の一日専有権で六課の一部を破壊しながらの騒動ではやと O H A N A S H I することになってしまい、必然的に空いていた隊長である俺が来ることになった。

マジで迷惑だ……このまま専有権も剥奪されちまえばいいのに……そんなことを考えながらシグナムとユイと一緒に並びながら歩いて行くと、シャツ八さんが駆け寄ってきた。

「申し訳ありません！」

「謝罪は良いから状況を……」

「はい、特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます……今の

ところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「なるほど……それじゃ、俺が探してきますよ。まだ中にいるみたいですし」

「私も手伝います」

「私もだ」

「申し訳ありません……助かります」

とりあえずシャツハさんとシグナムは中から、俺とユイは外から探すことになり、それぞれバラけて探すことになったが……

「広いな……」

無理ではないけど隠れている子供を探すには骨が折れそうだし……ユイはすでに俺と別れて探しているので俺も探そうとは思うがどこから探せばいいのか見当もつかなかった。

仕方なしにあてもなく彷徨い歩くことで探すことにした俺は、子供の隠れられそうな所を中心に歩いていくが一向に見つからない。

そろそろシャツハさん達とも合流しようと思つくと建物内に続く道を進んでいくと近くの草むららがさがさと音をたてて揺れた。

草むらから野生のウ エルさんが飛び出した！

「……………」

「ひっ、い……………」

えと……………あの女の子だよね？

なんでウ エルさんの人形を持ちながらウ エルさんの着ぐるみを着てるの？

「えっと……そのウサギ(?) 気に入ってくれた？」

「……これはウ エルさん」

「……そのウサエルさん気に入ってくれた？」

「……(ぐっ)」

親指を立てるほど気に入りましたか、そうですか……

「えっと、なんでいなくなったのかな……いや、それ以上にその着ぐるみはどうしたのかな？」

「? 起きたら着てた」

マジで呪いのアイテムじゃないだろうな!?

一度お被いした方がいいんじゃないのか!?

優「まさかの二連ウ エルさんネタ……」

クロウ「……と言うよりウ エルさんってなんなんだ？」

優「元ネタはおおかみかし」

ふあやて「是非一度見てくだしやい!」

夢刹「(なでなで)」

ティア「……ラジオなのになんでここまでゲストがしゃべらないんですか……」

ヘイト「ゲストのくせに生意気です」

優「無茶苦茶だ……んじゃ、次のコーナー」

夢刹「本音ぶつちやけコーナー」

クロウ「質問コーナーです」

ティア「短っ!? 過去最短じゃないの!?!」

優「うん、まあ、まとめれば確かにそうなんだけどね……」

ふあやて「えっと、質問をお願いしましゅ……」

クロウ「最初は「うこ」さんからの質問……って、あんたは小学生か!? 放送規制用語が入ってしまったやんけ!」

ティア「……饒舌だ」

優「突っ込みたいのは分かるけど質問の方を……」

クロウ「すまん……質問は「優の名前」って最初から決まっていたの?」  
「……これは作者か?」

作者「いんや、全然?」

優「今明かされる衝撃の事実!?!」

作者「設定自体は色々あったんだけどね、なのはみたく一般人が強力な魔導師だった的なやつとか、いきなりクロノと組んでの時空管

理局サイドとか」

ふあやて「なんで今の設定に落ち着いたんでしゅか？」

作者「意外と原作知識がボロボロだつてことに執筆直前で気が付いたから割と原作沿いで行くことにした」

ティア「何で書こうと思ったの!？」

作者「いやゝ、他の作者様の作品を見て楽しそうだなって思つてリア友と何となくそんなことを話したら「じゃあ書けしwww」つて言われて思い立った」

優「俺の名前はどつやつて……」

作者「友人がとある人の名前から取つた」

優「実在の人物かよ!？」

作者「大丈夫! 本人の許可はとつてあるし何より漢字とかが違う!」

ふあやて「ならいい……のでしゅか？」

ティア「あんまり良くない気がするけどね……」

優「それじゃ、次!」

夢剎「えーつと、あ……」

ヘイト「早く読んでください、遅い人は嫌いです  
h a t e だけに」

夢刹「んー、俺からなんだけどいい？」

優「あ、ラジオネームまんまなんですわ……いいんじゃないですか？」

夢刹「……それでは、「ハーレムの中で一番怖い女性は誰？」（出来れば本人の前で言ってください！）」で

優「……ミンナ大好キダヨ？」

クロウ「片言だぞ……」

優「み、みんな……素敵な人……だか……ら」

クロウ「つて！ ジンマシン出てるやんけ！？ そこまで無理せんでもいいんじゃないか！？」

作者「基本的に全員怖いつてことで、それでは！」

ティア「……あれだけの為に来たの？」

ヘイト「鬱陶しくて嫌いです h a t e だけに」

夢刹「さいごのコーナー」

クロウ「主人公を放置して進めるんかいな！？ てか地味に平仮名でほかすんやない！！」

優「いや……やるう。まだいける……」

ティア「変な所で漢ね……」

優「今回は作者がモンスターハンターからのゲストと言う事でドキドキノコ料理です」

クロウ「嫌な予感しかしない……」

夢刹「奇遇だな、俺もだ」

優「んじゃ、俺はこれで」

ふあやて「ドキドキしましゅー！」

ヘイト「私はこれです」

ティア「なんか見栄えが悪いけど大丈夫よね？」

クロウ「人間いつか死ぬんやああ！ いつになろうと知ったことあらへんー！」

夢刹「……南無」

「「「「「ぱくっ」「」「」「」

優「さっきの精神的ダメージが癒された気がする」（回復効果）

ふあやて「ふえー！？ なんか元気になったでしゅー！」（いにしえの

秘薬効果)

ヘイト「どこまでも走れる気がします」(強走薬効果)

ティア「何もないうって何よ……」(変化なし)

夢剎「……」(疲労、体力1効果)

クロウ「……」(疲労、体力1、麻痺、眠り、攻撃力減少、守備力減少効果)

優「……明らかに軽傷じゃ済まない人が二人ほどいるんだが……」

ふあやて「ま、まだ息はあるでしゅ!」

ヘイト「死者が出てないならいいですね」

優「良くねえだろ!？」

ティア「あ、でもそろそろ尺が……」

優「とりあえず締めたら急いで病院に連れてくぞ!」

ヘイト「この場合はネコに頼んだ方がいい気がします……」

優「どうでもいいからさっさと締める!」

「……この放送は「魔法少女リリカル……なんとか!」とは一切関係ありません! ストーリーがグチャグチャだったりキャラ崩壊していても一切クレームは受け付けません!」「」「」

第十二回「嫌な予感はあるけど良い予感はあるほど当たらない」(後書き)

モンハンでドキドキノコが原因で死んだのは私だけではないはずだ！

え？ 私だけ？

……次回も期待せずにお楽しみに！

第十三回「同じネタは三回までなら許されるって偉い人が言っていた気がする」

ヤバイ、そろそろネタが……

まあ、元々大したネタもないからいいか（おい



貴哉「やめんかい」

ハテナ「痛いではないか」

緋水「明らかにお前が悪いだろう……」

ハテナ「おや？　ところで優少年は？」

ヘイト「お馬鹿ななにはのせいでお休みです」

ふあやて「へ、ヘイトちゃん!？」

ハテナ「ふむ……ならば連れてくることにしよう」

ティア「連れてくるって……」

なによは「どうやって?」

ハテナ「こうやってだ」

優「おわっ!？」

貴哉「なんかもう色んなものを無視してるよな（作者の意思とか、  
優の意思とか）……」

ハテナ「はっはっはっ、照れるじゃないか。それでは優少年、これ  
を着て貰おうか?」

優「スク水にセーラーって……誰が喜ぶんだよ!？」

ハテナ「少なくとも私は喜ぶぞ?」

??「楽しそうだな?」

ハテナ「それはもう楽しいに決まって……」

優「?」

??「久しぶりだな、ハテナ」

ハテナ「ししし師匠!? なにゆえこのような所に!?!」

なによは「師匠?」

ふあやて「ふえく、ハテナさんの師匠さんでしゅか」

ティア「それ以上にあの取り乱し方が気になるんだけど……」

緋水「まあ、師匠ぐらいだろうな。ハテナの暴走を抑えられるのは」

優「えつと、どちら様で?」

??「あ? 自己紹介しないと駄目か? えくと俺の名前は秘密だがハテナの師匠だ。これでも腕は立つぞ? まあこっちに出てきてもハテナのストッパーだかな。後得物は刀だ」

優「はあ……そうですか……」

師匠「それで? ハテナは何をしようとしていたんだ?」

ハテナ「へ！？ え、えーっとですね。スク水セーラーに挑戦してみようかと！」

師匠「やめる、んなことしても気持ち悪い。もしやったら俺の刀の錆にするぞ？」

緋水「うわあ〜」

貴哉「ばつさり言いきつたな……」

優「……ハテナ、大丈夫か？」

ハテナ「分かってはいるがここまでざっくり言われると少し……な」

ヘイト「うるさいです。早く最初のコーナーに入りますよ」

師匠「リリカルなんとか裏話……だとさ」

ハテナ「こ、これは本編のシーンをコメディ成分を多くするコーナーです！」

貴哉「ハテナ、声が裏返ってるぞ……」

緋水「今回はこのシーンだ」

「優さん、どうしたんですか？」

「いや……ちょっとドワーエとの出会いをな……」

「そんな……恥ずかしいです」

頬を染めてる所悪いけどあれって明らかに拒否権なかったよね？  
と言うより今思い返すと結局俺に平穩ってなかったんだなあって思  
えるね……な、泣いてないよ？ ちよつと目から汗が出てきただけ  
さ！ 今年の夏は暑いしね！

「あ、ヴィヴィオ？ ちゃんとピーマン食べなきゃ駄目だよ？」

「うっ、苦いの嫌〜い」

「おいしいよ？ 食べてごらん」

「うっ〜」

そついや、今日の朝食ってピーマン入ってるんだっけ？ と言うよ  
りヴィヴィオってオムレツだったよな？ むしろピーマンを避けら  
れた所に俺は驚きなんだが……

「苦いのは嫌かもしれんけどちゃんと食べへんとママ達みたいな美  
人になれへんで？」

正論かもしれないけど無理に食わせることもない気が……  
何となく視線を横にずらしてフード陣の方を向くとキヤロがエ  
リオにニンジンを渡そうとして止まっていた。

……見なかつたことにしよう。

そう思い、反対のマテリアルズの方を向くとライカがヴェロニカに  
玉ねぎを渡そうとして固まっていた。

なんか色々な奴に迷惑をかけている気が……

「パパ〜」

ヴィヴィオは涙目になりながら俺に助けを求めてくる。

とは言ってもここで許すわけにはいかないだろう。

「ヴィヴィオ」

俺は少し強めにヴィヴィオに呼びかけるとヴィヴィオは助けを求め  
るような目で俺を見つめてきた。

「ピーマンは食べてやるけど他のは食べるよ？」

「（ぱあああ）うん！」

そう言うと食堂にいる奴のほとんどが派手に転んだ。

ちなみに転ばなかったのは俺達とドワーエ、後はヴェロニカぐらい  
か？

なにか変なことを言ったか？

「優君！そこは無理にでもピーマンを食べさせる所じゃないかな

！？」

「いや、どうしても苦手なら仕方ないだろ……他でも栄養はとれ  
る」

「いやいや！そこで食べなくていいって言ったらヴィヴィオどん  
どん甘えちゃうよ！？」

「これぐらいの歳の子供は甘えてなんぼだ。それにヴィヴィオは他  
のはちゃんと食べるよな？」

「うん！ニンジンも玉ねぎもちゃんと食べるよ！」

うん、そのチョイスで軽く石化している二人がいるけど今は放って  
おこじつ。

「駄目や！ピーマンのおいしさも分からんのやら料理を食べる資  
格はないで……！」

「それは言いすぎだろ……てか、食べさせないと駄目なのか？」  
「……もちろん！」」「……」

ヴィヴィオが泣きそうな顔を始めた。

とは言ってもここまでこられると流石に止められる気がしない……

「それじゃ、ヴィヴィオ。ピーマンを食べられるようになったら何でも願いをかなえてやる」

「……何でも？」

「ああ」

「本当に？」

「ああ、いいぞ」

「じゃあ、食べるー！」

意外とあっさり解決したな……まあ、俺としても無理強いよりかは自分から食べてくれる方が嬉しいけど……

「食べた〜」

「お、偉いぞ。ヴィヴィオ、少しも残さずにちゃんと食べられたじゃないか」

俺はヴィヴィオを撫でながらそう言つとヴィヴィオはくすぐったそうに目を細めながら笑っていた。

「それで？ 願い事は何だ？」

「えつとね……私の願い事はね？」

ヴィヴィオはニコニコしながら俺の手を握る。

「パパのお嫁さんになりたい！」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

「ははっ、そうか。それじゃ、ヴィヴィオがもう少し大きくなったらな?」

「うん!」

俺とヴィヴィオがそんな微笑ましい会話をしているとなのは達が俺を掴んで食堂から連れ出した。

「はやてちゃん! シグナムさん! シヤマルさん! ザフィーラさん! ヴィヴィオを見ていてください!」

「了解や!」

いや、軽く首しまってるんですけどとりあえず放してくれませんか? しばらく引つ張られながら歩いて行くと(引きずられて?) ようやく俺は解放された。

「優……さっきの話ってどういう事かな? お姉ちゃんに教えて欲しいな?」

「けほっ、さっきって? 何のことだよ?」

首を絞められたせいでまともに呼吸もできなかった俺は少しせき込みながらも聞き返すと、

「とぼけてんじゃねえ! お、お前は小さい子供が好きなのか!?」

「? まあ、可愛らしくていいんじゃないの?」

俺の言葉にヴィータとマテリアルズ、そしてエリオとキャロは小さくガッツポーズをとった。

マジで何なの?

「ゆ、優にい！ 私は対象外なの！？」

「いや……何が？」

「お兄ちゃん！ ノーマルに戻って……！」

「な！？ ティアちゃん！？ くっつき過ぎ……！」

「顔を赤くしているからまだ間に合うの……！」

「させません！」

「いいから離れるおお……！」

なんか滅茶苦茶もみくちやにされた。

しかもその間に誰かに体をまさぐられたし……

痴漢で訴えたら勝てるよね？ 本当に……

貴哉「何でも叶えるなら……」

「優さん、どうしたんですか？」

「いや……ちょっとドウエとの出会いをな……」

「そんな……恥ずかしいです」

頬を染めてる所悪いけどあれって明らかに拒否権なかったよね？

と言うより今思い返すと結局俺に平穩ってなかったんだなあって思えるね……な、泣いてないよ？ ちょっと目から汗が出てきただけさ！ 今年の夏は暑いしね！

「あ、ヴィヴィオ？ ちゃんとピーマン食べなきゃ駄目だよ？」

「うっ、苦いの嫌い」

「おいしいよ？ 食べてっくらん」

「う〜」

そういや、今日の朝食ってピーマン入ってるんだっけ？ と言うよりヴィヴィオってオムレツだったよな？ むしろピーマンを避けられた所に俺は驚きなんだが……

「苦いのは嫌かもしれないけどちゃんと食べへんとママ達みたいな美人になれへんで？」

正論かもしれないけど無理に食わせることもない気が……

何となく視線を横にずらしてフォワード陣の方を向くとキャロがエリオにニンジンを渡そうとして止まっていた。

……見なかったことにしよう。

そう思い、反対のマテリアルズの方を向くとライカがヴェロニカに玉ねぎを渡そうとして固まっていた。

なんか色々な奴に迷惑をかけている気が……

「パパ〜」

ヴィヴィオは涙目になりながら俺に助けを求めてくる。

とは言ってもここで許すわけにはいかないだろう。

「ヴィヴィオ」

俺は少し強めにヴィヴィオに呼びかけるとヴィヴィオは助けを求めような目で俺を見つめてきた。

「ピーマンは食べてやるけど他のは食べるよ？」

「ぱぁぁぁ（うん…）」

そう言つと食堂にいる奴のほとんどが派手に転んだ。  
ちなみに転ばなかったのは俺達とドゥーエ、後はヴェロニカぐらい  
か？

なにか変なことを言つたか？

「優君！　そこは無理にでもピーマンを食べさせる所じゃないかな  
！？」

「いや、どうしても苦手なら仕方ないだろ……他でも栄養はとれ  
る」

「いやいや！　そこで食べなくていいつて言つたらヴィヴィオどん  
どん甘えちゃうよ！？」

「これぐらいの歳の子供は甘えてなんぼだ。それにヴィヴィオは他  
のはちゃんと食べるよな？」

「うん！　ニンジンも玉ねぎもちゃんと食べるよ！」

うん、そのチョイスで軽く石化している二人がいるけど今は放つて  
おこつ。

「駄目や！　ピーマンのおいしさも分からんのやら料理を食べる資  
格はないでー！」

「それは言いすぎだろ……てか、食べさせないと駄目なのか？」

「「「「「もちろん！」「」「」「」

ヴィヴィオが泣きそうな顔を始めた。

とは言つてもここまできらられると流石に止められる気がしない……

「それじゃ、ヴィヴィオ。ピーマンを食べられるようになったら何  
でも願いをかなえてやる」

「……………何でも？」

「ああ」

「本当に？」

「ああ、いいぞ」

「じゃあ、食べる！」

意外とあっさり解決したな……まあ、俺としても無理強いよりかは自分から食べてくれる方が嬉しいけど……

「食べた」

「お、偉いぞ。ヴィヴィオ、少しも残さずにちゃんと食べられたじゃないか」

俺はヴィヴィオを撫でながらそう言つとヴィヴィオはくすぐったそうに目を細めながら笑っていた。

「それで？ 願い事は何だ？」

「えっとね……私の願い事はね？」

ヴィヴィオはニコニコしながら俺の手を握る。

「パパもウ エルさんになつて！」

「すいません！ それだけは無理です！」

まだウ エルさんあつたの！？

もう着てないからつきりもうなくなつたとか処分されたのかと思つてたぞ！？

「何でも願いを叶えてくれるつて言つたでしょ！」

「それを言われると弱いんだよ……分かつた、ただし俺の部屋でだけな？ ヴィヴィオにしか見せない……それでいいか？」

「うん！」

仕方ないよな……俺から言い出したことだし……  
その後、俺の部屋で俺はヴィヴィオの前だけでウエルさんの服を  
着たが……

「パパ……すごく可愛いよ（ハアハア）」

「ちょ、ちよつと待てヴィヴィオ……何で息を荒くしながら近づい  
てくるんだ？」

「……………大丈夫だよ？」

「その間が信用できん！ ちょ、く、来るな……………」

「ちよつとだけ……………痛いの我慢できる？」

「できません！ って……………アーーーーッ……！」

優「マジで採用されなくて良かった……………」

緋水「あんなことがいつ起きても不思議じゃないからな……………」

貴哉「まあ、頑張れ」

ヘイト「私より年下なのにあんなことをするなんて生意気です（ほ  
そつ）」

優「？ なんか言った？」

ヘイト「っ！？ な、何でもありません！」

ふあやて「もう、次のコーナーに行かないと駄目じゃないでしゅか  
？」

ティア「そうですね」

なによは「次のコーナーは！」

緋水「本音ぶつちやけコーナー！」

貴哉「これは質問に答えるコーナーだ……てか、何回もやってるのにこんな説明いるのか？」

優「俺に聞かれても……」

師匠「んじゃ、俺からな？」「いつも貴方の真後ろに」さんからの質問「優君の好きな人はだれかな？」「ラバーズの前で答えてくれな  
いかな？（答え無かつたら神の権限使つて女体化させてフェイト達  
の前に放置するからよろしく）」だそうだ」

ラバーズ「……………」（ドキドキ）「……………」

優「なに！？」「この質問！？」

師匠「さつさと答えないと大変なんじゃないのか？」

優「えつと……じゃあ兄貴で」

ラバーズ「……………」却下！！」「……………」

優「ええっ！？」

緋水「その解答は誰も望んでないんじゃないかな？」

ハテナ「さあ、お姉さんに話してごらん？　そしてこの格好を」  
じろ）「い、いや、何でもないぞ？」

なによは「優君の好きな人何て決まってるよね！？」

ヘイト「ええ、決まっていますよ」

ふあやて「ふええええええ！？」

ティア「（私だったら嬉しいな……）／／／／／／／／」

優「えと……じゃあ、ヴィヴィオで」

ラバーズ・ラジオ娘「……若さが足りないのか！？」「……」

優「えと……なにこれ？」

ハテナ「優少年が罪作りな少年と言う事だ」

貴哉「次の質問行くぞ」

ハテナ「では、これだ。「胃痛持ち」さんからの質問、「優が地味  
と思うキャラは誰ですか？」だ、そうだ。ほとんどのメンバーも揃  
っていることだし、ここで言ってお賞おうか？」

優「虐めか！？　虐めなのか！？」

ラバーズ「……誰！？」「……」

ラジオ娘「」「」（ドキドキ）「」「」

優「いや、何と云うか色んな意味でみんな濃いから特にいないかな？」

師匠「どっちつかずな意見だな」

緋水「そんなだからハーレムを作るんだ」

貴哉「……優らしいな」

優「なんか酷い言われようだ……」

ハテナ「さあ、例のコーナーに行こうか？」

師匠「ん？ なんかあるのか？」

ヘイト「参加者を天国と地獄に分けるコーナーなので嫌いです

h a t e だけに」

ふあやて「あによ……今回の料理は……」

なによは「白井 健斗」さんの作品から一樹さんが焼きたてのこんがり肉Gを送られました」

優「あゝ、前回急いで病院に送っちゃったから食べる暇なかったんだよな……焼きたてって所はこのラジオ独特の不思議補正と言う事にしておう」

ティア「あれ？ でも7個じゃ足りませんか？」

師匠「1、2、3……9人か。二つ足りないな」

シャマル「私にお任せ！ この前通販で買った高級肉焼きセットで用意してきました！」

優「通販でそんなの売ってるの！？ てかシャマルが作ったのか？」

シャマル「はい！ これです！」

【真っ黒コゲ肉G×2】

貴哉「発ガン性物質の塊だな」

緋水「早死にするね」

ハテナ「なかなかお目にかかれないものだな」

師匠「新しいものを創り出したか……」

ヘイト「黒過ぎて嫌いです     h a t e だけに」

優「大丈夫だ、俺も嫌いだから」

なによは「うう……まだぴちぴちのままでもいいの……」

ふあやて「ふえ……」

ティア「これに当たりたくないですね……」

シヤマル「あ、ティアちゃんは無条件でこんがり肉Gだって。一樹さんからの強い要望で

」

全員（除：ティア）「「「「（え…………なにそれ？）」「」「」

ティア「（助かったあ…………）」

優「てことは…………」

貴史「残り6個のこんがり肉Gを…………」

緋水「残る8人で…………」

ハテナ「奪い合いだな…………って…………」

【こんがり肉G×2】

師匠「こういうのは早い者勝ちだ」

ヘイト「助かりました」

なには「おいしーの」

ふあやて「えと…………いいんでしゅか？」

緋水「いつの間に…………」

優「早い…………」



師匠「まあ、死ぬことはないだろう」

なによは「死人が出たらさすがにこのラジオが終わっちゃうの」

ティア「それ以前にそこまでギリギリなコーナーもどうかと思いますけど……」

ふあやて「優じゃん……ごめんなしゃい……」

優「耐性は持っているけど……進化していないか？」

ハテナ「さあ、逝こうか……優少年」

優「逝きたくないけどな」

優「……（気絶）」

ハテナ「……（気……絶？）」

緋水「優は息はあるな」

貴哉「ハテナは限りなく死にかけてるぞ？ てかもう川を渡りかけ

てるんじゃないのか？」

師匠「最悪、こっちで気づけずれば大丈夫だろ」

なによは「じゃ、今回も無事に終了ですね！」

ヘイト「お疲れさまでした」

ティア「無……事……？」

ふあやて「ふああああ！！ 優しゃん！ しっかりしてくだしゃい  
！！！」

緋水「まあ、とりあえず一旦締めてからこいつらを何とかしないと  
な」

貴哉「だな」

全員（除：優、ハテナ）「この放送は「魔法少女リリカル  
……なんとか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャ  
グチャだったりキャラ崩壊していても一切クレームは受け付けませ  
ん！！！！」

第十三回「同じネタは三回までなら許されるって偉い人が言っていた気がする」

ラジオのワンクッションって普段ならいいんだけど今みたいにギャグ方面に走りだした時ってネタを考えるんがっらいWWW

まあ、ほどほどにゆるゆる頑張ろう！

第十四回「奴が来る！」（前書き）

決して緑の悪魔ではありません！

## 第十四回「奴が来る！」

????? 「リリカルラジオがあああ、はあじまるぞお？」

優 「……………」

なによは 「……………」

ヘイト 「……………」

ふあやて 「……………」

優 「……………来る所間違えたか？」

????? 「まあまあ、優君。君が間違っていることなどお、ありはあしないい」

優 「若 ボイスの人に知り合いはいませんので！」

????? 「私はあれだあ、リスナーのお、アイドルウウウ。可愛い系アイドルウサ（ ）エル（ ）と言うものだあ」

優 「遂にラジオ進出！？マジで!？」

ウサエル 「これからもよろしくおねがいするぞお？ 相棒」

優 「嫌だ……………」

なによは 「私より濃い人（？）なの……………」

ヘイト「新人(？)なのに生意気です」

ふあやて「この人(？)しゅこし怖いでしゅ……」

ウサエル「さあ、相棒。そろそろゲストを呼ばないとまずいんじゃないのかあ？」

優「あ、うん。そうだね。はい！ 今回のゲストは「雨季」様の作品、「チートじゃ済まない」から……」

雨季「なによはー！ー！ ヘイトー！ー！ー！ ふあやてー！ー！ー！ー！  
！ 俺だあああ！ 結婚してくれえええ！ー！ー！ー！」

ラジオ娘「(優の後ろに隠れる)」

？「優は私が食べてあげ……相手してあげるわ」

優「アウトオオオ！ 限りなくアウトオオオ」

ウサエル「そんなことよりい、そこのお嬢さんは自己紹介と云うものが必要なんじゃないかい？」

雨季「……」

？「……」

優「フリーズしたくなるのは分かるけどフリーズしないで……」

雨季「ウサエルさん!？」

？「若　ボイスなの！？」

ウサエル「よせやい、てれるじゃあねえか」

優「照れる所が分からないがとりあえず自己紹介を……」

？「ちよつと現実を受け止めさせて……」

優「了解」

【　十分後　】

？「こんにちは　『チートじゃ済まない』影の主人公、一条楔よ  
主人公の要が性転換した際に生まれたの。二刀流だから好きなのは  
可愛い女の子と、男の子。本命は『転生夫婦の並行世界旅行』の鈴、  
愛人はフィーラよ　よろしく」

ふあやて「二刀流？」

優「ふあやては知らなくていいからな」

雨季「なにも知らないふあやてちゃんを自分の色に染める……いい  
！」

ふあやて「ひっ！？」　（優の後ろに隠れる）

ヘイト「あなたなど恐るるに足りません！（ひっそりと優の後ろに隠れる）」

なによは「ガクガクブルブル（頭隠して尻隠さずの状態で優の後ろに隠れる）」

楔「それじゃ、優はこれを着てね」

優「何で初音　クの格好をしなくちゃならんの！？　嫌だよ！？　俺男だからね！？」

楔「大丈夫！　ソニックフォームにも違和感なく着こなせる男の娘だから！」

優「嬉しくねえ！！」

なによは「（見てみたい……）」

ヘイト「（望まれているのなら仕方ないですね、けして私が見たいと言っわけではありません！）」

ふあやて「（／／／／／）」

ウサエル「最初のお、コーナーを済ませようじゃあねえか」

優「あんたの言うとおりだけどそれに従ったら負けな気がする……」

ウサエル「細かいことを気にしたらあ負けだぜえ？　相棒」

ヘイト「とにかく最初のコーナーに行きましょう……」

楔「リリカルなんとか裏話」

雨季「このコーナーでは本編のシーンを改善、または改悪して晒すコーナーです」

優「人それぞれの説明の仕方があるなあ……」

楔「今回のシーンはここ」

「シャマル！ ザフィーラ！！」

「優……君？」

「暁か……」

「援軍か？ でもたった一人増えたぐらいじゃ、僕のレイストームは防げない」

ここにいるのは確か目の前にいるオットーと今は目に見える範囲にはいないデイド……こっちにシャマルとザフィーラがいるとは言え負傷している身ではあんまり戦力としては期待しない方がいいだろう。

『シャマル、ザフィーラ。六課を守ることにだけ集中してくれ、攻撃は俺がやる』

『でも……優君の魔力が……』

『いや、任せよう。どちらにしろ私たちではまともに戦えん』

確かになれないデバイスばかり使ってその上ここまでの移動をソニ

ツクフォームでのノンストップで飛ばし、手負いを抱えながら六課を守り、戦闘機人を二人相手にする……  
今までとは比べ物にならないほど難易度は高い……だけど不可能ではない。

六課に来る途中で来た念話通りならばすでにクアットロとこちらの二人を除いて全員捕えたらしい。

詳しいことは分からないがノーヴェとウェンディとスバルとギンガがかなりの負傷をしたらしい。

あちらの方にはチンクも行く予定だったが最初に抑えたからなんとかなると思っただがかなり無茶したらしい……これが終わったら「おはなし」だな。

「分かっているとは思いますがすでに半分以上のお前達の味方はこっちが捕えた。こちらの状況もすでに伝えてある……投降するなら今のうちだぞ？」

「クアットロ姉が怖いから嫌だ」

「……そうか、なら仕方ないな」

こいつも辛い目に遭っているのかななんてことを考えながらふと思いついたことを言ってみた。

「なあ、俺はクアットロのいる位置も分かるし、とりあえず捕まえればお前はお置きとかされないんじゃないの？」

「……投降する」

『ちよつとお！？　ここで裏切るの！？』

「よし、オットー。こいつらにクアットロの場所を教えてください。俺は先に向かっているから」

『デイドちゃんも止めて！』

「オットーのしたいことに私は従います」

うわ〜……人望ねえ〜……

「そもそも、ドクターもウーノ姉もドゥーエ姉もトーレ姉もルーテシアお嬢様も最初から参加していない時点で無理がある……」

あゝ、うん。トーレがいなかったおかげで結構早くこっちに来れたし、ルールーちゃんがいなかったおかげで他の奴らも早く動けたわけだし……

そう考えるとばれてるのにそのまま動くってかなり強引だよな……

『優君！ 残る一人を見つけたの！』

『ひっ！？ エースオブエース！？ だ、誰か！ 残っている人はすぐにこっちに「スターライトブレイカー……」キヤ……』

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……悪魔でもいいって言うてたっけ、そう言えば……

「……………魔王」

『にや！？ 魔王は優君だよ！？』

「おい、何気に失礼なことを言うな。ほとんど戦闘用の技を持たない奴に問答無用で大技をぶつけるような奴よりかは遥かにマシだ」

マジでなのはよりマシだと思っぞ？ うん。

雨季「悪魔だから……」

「シャマル！ ザフィーラー！」

「優……君？」

「暁か……」

「援軍か？ でもたった一人増えたぐらいじゃ、僕のレイストームは防げない」

ここにいるのは確か目の前にいるオットーと今は目に見える範囲にはいないデイド……こっちにシャマルとザフィーラがいるとは言え負傷している身ではあんまり戦力としては期待しない方がいいだろう。

『シャマル、ザフィーラ。六課を守ることにだけ集中してくれ、攻撃は俺がやる』

『でも……優君の魔力が……』

『いや、任せよう。どちらにしろ私たちではまともに戦えん』

確かになれないデバイスばかり使ってその上ここまでの移動をソニックフォームでのノンストップで飛ばし、手負いを抱えながら六課を守り、戦闘機人を二人相手にする……

今までとは比べ物にならないほど難易度は高い……だけど不可能ではない。

六課に来る途中で来た念話通りならばすでにクアットロとこちらの二人を除いて全員捕えたらしい。

詳しいことは分からないがノーヴェとウェンディとスバルとギンガがかなりの負傷をしたらしい。

あちらの方にはチンクも行く予定だったが最初に抑えたからなんとかなると思ったがかなり無茶ならしい……これが終わったら「おはなし」だな。

「分かっているとは思いますがすでに半分以上のお前達の味方はこつちが捕えた。こちらの状況もすでに伝えてある……投降するなら今のうちだぞ？」

「クアット口姉が怖いから嫌だ」

「……そうか、なら仕方ないな」

こいつも辛い目に遭っているのかなんてことを考えながらふと思いついたことを言ってみた。

「なあ、俺はクアット口のいる位置も分かるし、とりあえず捕まえればお前はお置きとかされないんじゃないの？」

「……投降する」

『ちよつとお！？　ここで裏切るの！？』

「よし、オットー。こいつらにクアット口の場所を教えてくれ。俺は先に向かつてるから」

『デイドちゃんも止めて！』

「オットーのしたいことに私は従います」

うわ……人望ねえ……

「そもそも、ドクターもウーノ姉もドウエ姉もトーレ姉もルーテシアお嬢様も最初から参加していない時点で無理がある……」

あゝ、うん。トーレがいなかったおかげで結構早くこつちに来れたし、ルールーちゃんがいなかったおかげで他の奴らも早く動けたわけだし……



なによは「にゃ!?!」

ヘイト「気持ち悪い例えで嫌いです hateだけに」

ふあやて「ふぁ……(気絶)」

優「ふあやてえええ!?! 大丈夫かああ!?!」

ウサエル「この程度で気絶するとはずいぶんとお可愛い子のよつだ  
あ」

優「あんたは少し黙ってる!」

ウサエル「つれないねえ、相棒。思わず、涙が流れちまうよお」

雨季「ギャップが凄過ぎて気持ち悪いな」

ウサエル「かゝゝはゝめゝ波ああああ!?!」

雨季「ひでぶつ!?!」

優「何やつちやってんの!?! お前!?!」

ウサエル「暁よ、一時的とはいえ、暴力ほど効率のいい指導はこの  
世に存在しないぞ?」

優「それ以前にゲストに怪我させてんじゃねえよ!?!」

雨季「復・活!」

ヘイト「……生命力が黒いアレよりも高いことを証明した瞬間ですね」

楔「それでは恒例の質問コーナーに行きましょうか」

雨季「んじゃ、俺から！」「日本刀」さんから「優少年は胃痛になるのか？」「こっちの主人公は空いたけどな！」

優「自慢になりませんって……一応ないかな？ どっちかって言うと頭痛のタネが増えて嫌になるぐらいかな？」

楔「では、次は私が……」「ヨシダ」さんから「優はこれを誰と一緒に使いたい？（遊園地一日フリーペアチケットと一緒にプレゼント）だ、そうですけど誰と行くんですか？」

優「ん〜、ユイか、シグナムか、ヴィヴィオか、ザフィーラか、グリフィスか、ヴァイスか、ユーノか、クロノ辺り？」

楔「同性の方が多と言う事はそういうk「ないから！」残念です……」

優「だって誘えるぐらい親しい奴で普通に楽しめそうなのってそれぐらいなんだもん……」

なによは「わ、私は!？」

ヘイト「私を入れないとは生意気です」

ふあやて「あ、あう……」



雨季「すでに死ぬ前提!？」

ウサエル「人生、何があるかあ、分からんものだあ」

雨季「じゃああなたが食べよ!!」

ウサエル「私はあ、人ではない。ウサ（エル）と言っ  
のお生命体だ」

楔「食べたり飲む人（生贄）は雨季でいい人」

全員（除：雨季）「」（黙って挙手）「」

雨季「粉 バナナ!!」

楔「あ、作者が死ぬ前に締めておきましょうか」

なによは「はい!」

ヘイト「分かりました」

ふあやて「? はい」

ウサエル「異議などあ、ありはあしない」

優「任せる」

雨季「自分が被害に遭わなければどうなってもいいのかああ!？」

全員「この放送は「魔法少女リリカル……なんか！」とは一切関係ありません！ ストーリーがグチャグチャだったりキラ崩壊していても一切クレームは受け付けません！！（一人だけ自棄になっている）」

第十四回「奴が来る！」（後書き）

どんどんゲストが変態に……気のせいだと思いたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7412m/>

---

魔法少女リリカル.....ラジオ！（仮名）

2010年10月15日19時49分発行